

大分県立埋蔵文化財センター

# 研究紀要

## 5

ヴェロニカのメダイ考

- 平戸草積の新発見資料を中心として -

後藤晃一

松尾城跡出土の挽き臼

植田紘正

願成院の密教仏画 2

- 十二天像 -

綿貫俊一

埋蔵文化財センター年報（令和2年度）

埋蔵文化財センター要覧

大分県立埋蔵文化財センター

# 研究紀要

5

## 目次

ヴェロニカのメダイ考 - 平戸草積の新発見資料を中心として -	後藤晃一	1
松尾城跡出土の挽き臼	植田紘正	20
願成院の密教仏画2 - 十二天像 -	綿貫俊一	29
埋蔵文化財センター年報（令和2年度）		63
埋蔵文化財センター要覧		76

# ヴェロニカのメダイ考

— 平戸草積の新発見資料を中心として —

後藤 晃一

はじめに

令和2年12月、長崎県平戸市草積在住の中村省三氏所有のキリシタン資料を拝見する機会を得た。中村氏の在住する草積町はかつて潜伏キリシタンの集落としてあり、中村省三氏の先祖は草積における納戸神信仰（潜伏キリシタン）の実質的な信徒組織だったと考えられる「ムラ（村）講」所屬だったとされる（大石2021）。

中村氏宅では、ロザリオ、聖杯、聖水容器、メダイ、鉄玉等所持しており拝見させてもらった。この内鉄玉は現代のもの、ロザリオについては、いつ頃のものか時期の認定が難しいが、19世紀再布教期以降のものと考えられる。聖杯や聖水容器については潜伏期に使用されていたものと考えられる。本稿ではこの内唯一布教期から存在していた可能性の高いメダイについて述べていきたいと思う。メダイ（図1）はヴェロニカをモチーフにしたもので、現在確認されているものとしては、日本で5例目となる貴重な発見である。当該資料については、帝京大学客員教授平尾良光氏によって、蛍光X線分析を現地で行いさらに鉛同位体比分析のサンプリングを行うことができた。そしてそのサンプリング資料をもとに帝京大学の三浦麻衣子氏によって、鉛同位体比分析を実施しその結果を得ることができたので、それらを踏まえた検証を行いたいと思う。

## 1. 平戸草積発見のヴェロニカのメダイについて

平戸草積の新発見資料について、これまで確認されている4例のヴェロニカのメダイと博多遺跡群で出土した鋳型と比較しながら見ていくこととする。これまで確認されている4例について概略を示すと、まず、豊後府内の中世大友府内町跡第13次調査区において16世紀後半の廃棄土坑から出土した資料が1例ある（図2-②）。発掘調査で出土したヴェロニカのメダイはこの1例のみである。次に、天草ロザリオ館に所蔵されているものに2例ある（図2-③・④）。この2例のヴェロニカのメダイは、当時水方だった系統の子孫が代々継承してきたもので、キリスト・マリアのメダイ（図3-⑦）と共に伝世されてきた。もう1例は、神戸市立博物館所蔵資料で、メダイの入った箱書きに「嶋原旧教徒より没収」とあることから、もとは島原の信者が持っていたものである（図2-⑤）。これら4点のヴェロニカのメダイに加えて、博多遺跡群第111次調査でヴェロニカのメダイの鋳型が1点出土している（図2-⑥）。この博多遺跡群では、キリスト・マリアのメダイ1点（図4-

⑧) と府内型メダイ 1 点も発見されている。

実見した平戸草積のヴェロニカのメダイ (図 1) は、長径 1.88 cm、短径 1.6 cm の円形で、キリストの顔がある面に向かって左側が大きく欠損し、さらに右下部分が若干剥離し、さらに頂部も一部剥離している。左右の剥離はどういう理由によるものかは不明であるが、頂部の剥離については、他のメダイでもよく見られる剥離の状況であって、恐らく頂部に紐などを通すための鈕が存在していたものが、剥離した痕跡と考えられる。ヴェロニカのメダイについては、神戸市立博物館所蔵資料や博多遺跡群出土の鋳型などには明らかに鈕が付く例が認められる一方、天草の資料のように鈕が全く付かない正円状のもの、いわゆるトークンのものも認められるが、この資料については、頂部の剥離状況等から鈕があったと考えるのが無難であろう。

次に大きさについて、表 1 を参照されたい。ヴェロニカのメダイはすべて円形で、豊後府内出土のものが径 2.0 cm、天草伝世の 2 点が径 1.95~1.97 cm と径 1.94 cm でほぼ同サイズと言える。神戸市立博物館所蔵の 1 点は長径が 2.4 cm、短径 1.9 cm であるが、長径には鈕部分が含まれているため、メダル面については径 1.9 cm でやはりほぼ同サイズと言える。また、博多遺跡群出土鋳型については、メダル部分の鋳型の径を測ると約 1.8 cm であり、やはりほぼ同サイズと言ってよいであろう。そこで、平戸草積の資料のサイズを再度見てみると、長径 1.88 cm、短径 1.6 cm であるが、短径については、メダル面の左右が一部欠損しているために短くなっている。よってメダイ自体の径は 1.88 cm ほどであるため、やはり他のヴェロニカのメダイとほぼ同サイズである。以上より、ヴェロニカのメダイについては、すべて径 1.88 cm~2 cm 前後の円形のほぼ同サイズであることが分かる。

草積のメダイの図像については、まずヴェロニカが描かれる面については (図 1 左側の面)、面の中央にキリストの顔が認められ、その頭上に横線見られ、その線は両側で下に折れてコの字形になっており、これはヴェールを表している。つまりヴェールに映し出されたキリストの顔が表現されている。ヴェロニカとは、キリストがゴルゴダの丘へ向かう途中に現れるシリアの架空の聖女で、彼女がキリストの顔の血と汗をヴェールでぬぐったところ、そのヴェールにはキリストの顔が写し出されたといわれる。メダイに描かれているのは、この布に映ったキリストの顔である。図 2-⑥の島原の資料が分かりやすいので参照されたい。

キリストの頭部には茨の冠ののっていると思われる。メダイがかなり摩滅しているために、茨の冠の表現は明確には見えないが、これまで確認されているヴェロニカのメダイのキリストの頭頂部の形を参考にすると、茨の冠があると判断するのが妥当であろう。具体的には、茨の冠の表現のない豊後府内出土の資料 (図 2-②) と茨の冠の表現のある天草伝世品 (図 2-③・④) と島原没収品 (図 2-⑤) の資料を見比べてみると、前者の頭頂部のラインは楕円形で頭の形をそのまま残しているのに対し、後者 2 点の頭頂部は前者に対して茨の冠の分若干角張っている点で異なることが看取される。そうした視点で、草積伝世資料を見てみると、頭頂部のラインは後者 2 点の茨の冠の表現がある方に近いことが分かる。

次に、反対の面については、聖母子像が確認される。面の中央左側には幼子のキリストが、

そしてその右手にはそのキリストを抱きかかえる聖母マリアが描かれている。聖母マリアについては上半身までしか確認できないが、島原没収品（図2-⑤）の図像に近いものと考えられる。縁辺部左上方には数点の列点が確認されるが、島原没収品（図2-⑤）のような図像の痕跡なのかどうかよく分からない。

以上述べてきたメダイの形態と図像について、これまで確認されている4例及び博多遺跡群出土鋳型と比較し検討をしていきたいと思う。

これまで確認されているヴェロニカのメダイについては、図像において大きく2形態に分類されている。まず一つ目の分類として（Ⅰ類とする）は、キリストの面については、キリストが茨の冠をかぶらずヴェールのしわが斜めにくっきりと描かれる。一方聖母子像の面については、向かって左側にマリアが立ち、右側に幼子のキリストが抱きかかえられる。このⅠ類については、豊後府内出土資料（図2-②）しか今のところ確認されていない。次にⅡ類として分類される資料は、まずキリストの面については、キリストが茨の冠をかぶり、背後のヴェールはコの字形に描かれるのみでしわは表現されない。一方聖母子像は、向かって右側に聖母マリアが描かれ、左側に幼子のキリストが抱きかかえられる。天草の伝世資料（図2-③・④）及び島原没収品（図2-⑤）が該当する。博多遺跡群で発見されたヴェロニカのメダイの鋳型（図2-⑥）は、十字架とヴェロニカのメダイをチェーンもしくは紐で通して使用していたものをそのまま粘土に当てて型をとった、いわゆる踏返しの資料であるが、そうした資料の性格上、ヴェロニカのメダイについては片面の様子しか分からない。この鋳型に見えるキリストの顔には、額に茨の冠がくっきりと書き出されていることから、裏面の状況は不明ではあるが、Ⅱ類に入れておくこととする。以上から、発見されているヴェロニカのメダイの中で、Ⅱ類は豊後府内を除いたすべての資料が該当するということになる。

さてここで、草積の資料を再度見てみると、まずヴェロニカの面については、キリストの頭上には茨の冠が表現されている可能性が高く、その背後のヴェールはコの字形で、しわの表現は認められない。一方聖母子像の面については、向かって右側に聖母マリアが表現され、左側に幼子のキリストを抱きかかえている。以上から、草積の資料はⅡ類に分類され、日本で確認されている典型的なヴェロニカのメダイの図像構成であることが分かる。

## 2. 平戸草積資料の素材についての検証：蛍光X線分析

今回、この草積の資料の調査にあたっては、帝京大学客員教授平尾良光氏より、蛍光X線分析をしていただいた。表1を参照されたい。

蛍光X線分析によると、錫77.0%、鉛23.0%でいわゆる錫を主体とした錫鉛製（ピューター）であることが分かる。日本国内で発見される鉛と錫を主成分とするメダイの化学組成を見てみると、鉛主体もしくは、鉛と錫を半々に混合しているものが多いことが確認されている（後藤2015）。一方ベルファストで1588年に沈没したスペイン艦隊ジローナ号から発見されたメダイは、圧倒的に錫主体となるものが多いことが分かっており、これに鉛同位体

比分析による産地同定を勘案して検証した結果（後藤 2019）、鉛主体もしくは鉛と錫を半々に混合しているものは日本を含めたアジア産、錫を主体としたものは西洋産ものが主体である可能性が考えられる（グラフ 1）。

この検証結果に草積の資料の数値を当てはめて見てみると、錫が 77.0%と主体となっており、化学組成については、ジローナ号発見資料のデータに近いことが分かる。では、平戸草積の資料は西洋からの舶来品かという点、それは拙速過ぎる。メダイの製作地を考える上では、素材の産地同定を検証する必要がある。そこで、次に平戸草積の資料の鉛同位体比分析による産地同定について検証していこうと思う。

### 3. 平戸草積資料の素材についての検証：鉛同位体比分析

帝京大学客員教授平尾良光氏により、現地でサンプリングを行っていただき、それをもとに帝京大学の三浦麻衣子氏によって、鉛同位体比分析を実施していただいた。その結果がグラフ 2・3 である。

まず、前述のジローナ号との関係をグラフ 4・5 の鉛同位体比分析結果で見てみると、ジローナ号がプロットされている場所と全く異なる場所に平戸草積の資料はプロットされていることが分かる。つまり、化学組成は似ていても、製作地についてはジローナ号資料とは全く異なる可能性を考えなければならないことを示唆している。

さらにこれまでにデータを入力できているキリシタン資料と比較してみると、それらのどことも異なる場所にプロットされている。そこで、いくつかの可能性をもって検証を進めていくこととする。

まず、これまで確認されている資料で最も近い一群は、天草のヴェロニカメダイと府内型メダイ、さらには博多遺跡群で出土しているキリスト・マリアのメダイなどがプロットされている、朝鮮半島産資料の一群である（グラフ 6・7 参照）。ただ厳密には、草積の資料はこれら確認されている一群とは若干離れた数値を示している。この問題を解く一つの鍵となるのが、天草で伝世されているヴェロニカのメダイとキリスト・マリアのメダイの関係である。まずはその検証過程について述べ、それに基づき、平戸草積の資料の位置づけについて考察していきたいと思う。

### 4. 天草伝世ヴェロニカのメダイと博多遺跡群出土銅型との関係

天草伝世のヴェロニカのメダイについて、まず 1 点（図 3-③）は、鉛 51%、錫 48% の鉛と錫の合金、もう 1 点（図 3-④）も鉛 65%、錫 33% の鉛と錫の合金で、両者共に近い金属組成を示している。さらに天草の 2 資料については、鉛同位体比分析では近い数値を示し、朝鮮半島産の産地と考えられる（グラフ 6・7）。また天草のヴェロニカメダイを伝世している水方の子孫宅には、さらにキリストとマリアを両面に描いたメダイ（図 3-⑦）が 1 点、ヴェロニカのメダイと共に伝世されている。このキリストとマリアのメダイの金属組成は、鉛 45.2%、錫 53.9% の鉛と錫の合金で、ヴェロニカのメダイと近い金属組成である。

しかし、問題はその素材の産地である。鉛同位体比分析（グラフ 6・7 の⑦天草のキリスト・マリアのメダイ）を見ると、共に伝世される天草のヴェロニカメダイ（③・④）とは異なった場所にプロットされており、別の産地が想定されるように見える。グラフ 6 では朝鮮半島と思われる場所にプロットされ、グラフ 7 では華南産のところにプロットされている。通常こうしたプロットでは、この産地は不明と言わざるを得ない。しかしながら、このキリスト・マリアのメダイの産地を推定する上で貴重な参考資料が発見できた。それが府内型メダイである。

府内型メダイは大半が鉛製で、その素材はタイのソントー鉱山から円錐形鉛インゴットを輸入し、それを溶解して製作されていることが解っている（後藤 2014・2015）。その府内型メダイの中には、純銅製のものもいくつか含まれており、純銅製の府内型メダイは、華南産素材が使用されていることが判明している。この華南産素材は、府内型メダイに限らず、豊後府内で確認される大半の銅製品においても確認されている（後藤 2016）。

そこでグラフ 8 を参照されたい。①府内型メダイと③天草のヴェロニカメダイのプロットされている場所を結んだ直線上ほぼ中間地点にこの⑦天草のキリスト・マリアのメダイがプロットされていることが分かる。これはグラフ 9 でも同様の状況である。これはどういうことを表しているかという点、天草のヴェロニカメダイに使われている素材と府内型メダイに使われている素材が混ざっている可能性を示すものである。つまりこの天草のキリスト・マリアのメダイは、朝鮮半島産材料と華南産材料が混合しているということになり、言い方を換えれば、天草のヴェロニカメダイと同じ朝鮮半島産材料に華南産材料を混ぜて（或いは混ざって）製作している可能性が高いことを示している。よって、同じ家に伝世されていることなどを勘案すると、天草のヴェロニカメダイと天草のキリスト・マリアのメダイは、両者とも同じような経緯をたどってこの家にもたらされた非常に近い関係にあるものであることが推察される。

さらに、前述の鋳型を出土した博多遺跡群第 111 次調査区をみてみると、同じ遺跡内で、天草のキリスト・マリアのメダイと同様の画像構成で、メダイの形態も同じ、さらにサイズも同じキリスト・マリアのメダイが出土している（図 4-⑧）。金属組成は鉛 44.7%、錫 54.6% と、これも天草の資料とほぼ同じ組成をしている。さらに、博多遺跡群第 111 次調査区出土のキリストとマリアのメダイは、鉛同位体分析で、グラフ 6・7（⑧博多のキリスト・マリアのメダイ）に示すとおり、天草のヴェロニカメダイ（③・④）の近くにプロットされ、朝鮮半島産の素材を使用している可能性が高く、材料的にも近いことが判明した。

つまり、博多遺跡群出土のヴェロニカメダイの鋳型と博多遺跡群出土のキリスト・マリアのメダイ（図 4-⑧）は、天草伝世のヴェロニカメダイ（図 3-③・④）と天草伝世キリスト・マリアのメダイ（図 3-⑥）と非常に近い関係にあることがわかる。そして、ヴェロニカメダイの鋳型が博多遺跡群第 111 次調査区で出土していることを勘案すると、天草伝世のヴェロニカメダイ及びキリスト・マリアのメダイは博多で作られている可能性が考えられるのである。



以上の天草伝世資料と博多遺跡群出土資料の検証成果を踏まえ、次に平戸草積の資料の製作地についても考察をしていこうと思う。

#### 5. 平戸草積資料の製作地についての考察

鉛同位体比分析のグラフ6・7を参照されたい。前述の通り、①草積のヴェロニカメダイは、朝鮮半島の一群に近い位置にプロットされるが、先に見てきた天草や博多の資料の一群とは若干離れている。そこで、先に検証した天草の資料のようにどこかの産地材料と混合されている可能性がないかをみていくこととする。

そこで、一つ可能性が考えられるのが、原城跡で出土した十字架との関係である。原城跡出土十字架は、一説には龍城中のキリシタンが窮地に立たされた中で鉄砲玉を溶かして作られたとされる資料で、その根拠となっているのが、この十字架がほぼ純鉛製或は鉛・錫製であることにあり<sup>2</sup>。グラフ10・11を参照されたい。グラフのプロットで見られるように、この②原城跡出土十字架は日本産材料を使っていることが分かる。そこで①草積のヴェロニカメダイと④天草のヴェロニカメダイと②原城跡出土の十字架のプロットされている位置をみてみると、④天草のヴェロニカメダイと②原城跡出土十字架を結んだ直線上に①草積のヴェロニカメダイが乗ってくるのが看取される。つまり、朝鮮半島産材料と日本産材料を混合している可能性が考えられる。

もしこの仮説が正しいとすれば、①草積のヴェロニカメダイには西洋産材料は全く使われていないため舶来品ではないことは明らかであり、日本産材料が使われていることから日本で製作された可能性が高いといえる。博多でヴェロニカのメダイの鋳型が出土していることから、ヴェロニカのメダイの国内製作事例があることは明らかで、平戸草積のヴェロニカのメダイが国内で製作された可能性は十分にある。さらに先に触れたように、天草のヴェロニカメダイは博多遺跡群出土鋳型と関係が深く、その素材は朝鮮半島産材料が使われていた。天草や博多で使われている朝鮮半島産材料が平戸草積のヴェロニカのメダイにも使われているとしたら、博多で製作された可能性も含めて、お互いに近い関係にあることは否めないであろう。

#### 6. 平戸草積資料の時期についての考察

次に平戸草積の資料の時期について検証していきたい。一概に時期と言っても、所有者や出土遺跡にもたらされた時期、メダイが存在していた時期、あるいは製作時期など様々であるが、このうち製作時期については、メダイに正確に年号が刻まれている場合<sup>3</sup>以外は認定が難しい。ここでは主に所有者や出土遺跡にもたらされた時期について考察していくこととする。

ヴェロニカのメダイについては、前述のように現在までに平戸草積の資料を含めて5例が確認できている。この中で、伝世資料については、所有者のもとにもたらされた時期について、そのことを記す記録がない限り時期の確定が極めて困難である。現在確認されている

4例の伝世資料については、いずれももたらされた時期についての記録がなく、時期の認定は難しい。そうした中でもたらされた時期がある程度確定できるのは、発掘調査で出土した豊後府内出土ヴェロニカのメダイ(図-②)である。出土資料はただ土中から出土したのみでは時期の認定が難しいが、考古学的発掘調査の中で出土した資料は、層位と共存遺物の時期を検証していくことによってある程度確定できる。そこでこの出土資料について、まず時期の認定を行い、それに基づいて、伝世資料の時期の推測を行っていくこととする。

まず、豊後府内出土のヴェロニカのメダイについては、廃棄土坑から出土しているが、共存する遺物は非常に希薄で、それによって時期の認定には至らない。発掘調査時の所見によれば、互いに切り合っている遺構との関係から、16世紀後半代に位置づけられるとされている(坂本他 2005)。ただ、豊後府内は1587年に島津氏によって焼き払われており、その後教会も機能を失っていることなどから、1587年よりも古いことはほぼ確実である。また、ヴェロニカのメダイの頂部、鈕の部分が剥離しているのは、使用による金属疲労が起因していることが考えられ、その使用期間を加味すれば、メダイ自体が豊後府内に存在した時期は1587年よりもさらに遡ることが想定される。そうした検証に加え、同じ豊後府内の遺跡で出土している指輪(図5-⑬)との関係を分析することによって、さらに年代を絞り込める可能性が出てきた。

指輪は中世大友府内町跡第43次調査区において、1570年代に埋まったと考えられる土坑から出土した。この指輪の蛍光X線分析と鉛同位体比分析によって、豊後府内出土のヴェロニカのメダイと、素材的にも近い関係にあることが判明した。まず、金属の組成は両者共に鉛と錫の合金である。表1・2から分かるように化学組成比率は異なっているが、メダイの金属は大きく、真鍮製と鉛・錫製と純銅製とに分かれる。そうした観点からいえば、両者は鉛・錫製で同じ種類の金属に位置づけられる。さらに両者は、鉛同位体比分析の数値も近似している(グラフ12・13)。つまり両者は、金属の種類的にも、あるいは製作過程的にも近い関係がある。そうすると、指輪は前述のように1570年代以前に位置づけられるので、指輪とヴェロニカのメダイが近い関係にあるのなら、メダイも指輪と同じ頃に府内に存在した可能性がある。

さらに、この指輪の出土時期は、豊後府内の町構造等の推移によく呼応している。大友宗麟はその治世下を通じてずっと豊後府内に居住していたわけではなく、白杵と豊後府内を移動していた。その宗麟の移動に伴い豊後府内の町の様相もその姿を大きく変えており、一つの画期が1570年代前半に認められることが、発掘調査結果による考古学的検証と文献史料の検証から明らかとなっている(鹿毛・坪根 2018)。この画期とは、大友氏館とその前に武家屋敷が並ぶ武士集住の町景観から、武家屋敷が白杵へと移ってその跡に町屋が広く展開する町景観への変化である。

宗麟は1556年まで豊後府内に居住し(長田 2018)、教会の建設のために敷地を提供するなどした結果、豊後府内では布教が活発に行われた。

特に、1555年には、ルイス・デ・アルメイダによって育児院、2年後の1557年には病院

が造られ、日本で最初の外科手術が行われるなど、豊後府内におけるキリスト教布教は活発な時期を迎える。1562年にコスメ・デ・トルレス神父が横瀬浦に移るまで、豊後府内では聖歌隊が聖歌を歌ったり、クリスマス劇が演じられたりと、異国情緒豊かな様相を呈していた。

豊後府内は、宗麟が臼杵に移住し、トルレス神父らが府内を去った後は、ポルトガル船の来航も途絶えた。そして、メインストリートである第2南北街路の道路面に、廃棄土坑が掘られる(坂本他2010)など、領主不在による無秩序化した都市様相を見せるようになる。それに伴って、活発だった府内のキリシタン文化も一時停滞を迎えたものと思われる。

そして1571年ごろ宗麟が再び府内に戻ってきた(長田2018)頃より、府内の町は再整備され、第2南北街路も再び整備されたと考えられる。前述の指輪は、この再整備された道路面より下から出土しており、よって1570年代以前の土坑から出土したこととなる。指輪が日本古来の風俗にないことを考えると、舶来したものである可能性が高く、したがって、トルレス神父らが訪れていてキリスト教布教が活発だった1560年代前半期までにもたらされた可能性が高いと考えられる。そして鉛同位体比分析によって、この指輪と近い産地の素材を使っていると思われるヴェロニカのメダイも、同じころにもたらされた、もしくは作られた可能性が高い。

次に博多遺跡群出土のキリスト・マリアのメダイとヴェロニカのメダイの鋳型については、遺構の初見からすると、キリスト・マリアのメダイは包含層から出土しており、共伴する遺物の初見から16世紀末～17世紀初頭に位置づけられている(佐藤2002)。またヴェロニカのメダイの鋳型については、唐津系の皿(慶長年間)や朝鮮王朝時代の陶器等が共伴している土坑から出土していることから、16世紀末～17世紀初頭に位置づけられている(佐藤2002)。しかしながら、これまでのメダイの研究では、1590年頃を境にメダイの流入形態が変化していることが分かかってきており、大きくは鉛・銅製の国内製主体から、真鍮製の西洋製主体へ変化する(後藤2015)。その起因となるのが、豊臣秀吉のバレン追放令による国内製作の制限である。したがって、博多遺跡群の出土資料は1587年以前とみるのが妥当であろう。さらにこの博多遺跡群からは、純銅製の府内型メダイも出土していることから、豊後府内との関係も近いことが考えられ、豊後府内のヴェロニカのメダイ同様に、さらに遡ることも考えられる。

また、先に博多遺跡群出土キリスト・マリアのメダイとヴェロニカのメダイの鋳型と天草のヴェロニカのメダイ及びキリスト・マリアのメダイが非常に近い関係にあると指摘した。そこで、この豊後府内、博多、天草、そして神戸市立博物館所蔵のもう一つのヴェロニカのメダイが没収された地、島原の4ヶ所に非常に密接に関係した宣教師がいる。それは豊後府内で日本最初の外科手術を行ったとされるルイス・デ・アルメイダである。1562年に豊後を出発したアルメイダはその後、博多を訪れている。翌1563年には島原に赴いて布教し、1566年には天草の志岐で布教を開始した。そして1569年には天草(河内浦)で布教開始し、崎津にも訪れた(パチエコ1989)。1563年のフロイスの「日本史」の記録に、「平戸の

島々のキリシタンたちは、新来の伴天連方が聖別したコンタツやヴェロニカのメダイを携えて来たことを聞くと、ある者は家を離れ、またある者は妻子を伴い、貧しかったにもかかわらずそれらを得ようとして船を雇って横瀬浦に赴いた。そして彼らは何をしに来たのかと問われると、ただ聖別した一個の玉(コンタ)と一個のヴェロニカを貰うだけの目的でやって来た、と述べた。」という記述がある<sup>9)</sup>。この一節から、宣教師がヴェロニカのメダイを持ってきて、分け与えていることが分かり、さらに日本の民衆はヴェロニカのメダイを大変渴望した様相がうかがえる。この頃アルメイダも横瀬浦におり、島原、豊後、博多を行き来している。アルメイダが布教を行っていく上で、当時の人々が渴望したヴェロニカのメダイを携えていたことは想像に難くない。

このように博多、天草、島原のヴェロニカのメダイは、ルイス・デ・アルメイダが関与しているとすると、1560年代まで遡ることも可能であり、豊後府内出土ヴェロニカのメダイや指輪と同じ頃に比定できることも想定される。

さて、これらを踏まえて、草積の資料を検証していこう。草積のヴェロニカのメダイは、前述のように天草や博多のメダイに使われている朝鮮半島産材料と日本産材料が混ざった国内製であることを指摘したが、朝鮮半島産材料を同じように使用していることに基づけば、天草や博多などの資料と同じころの時期に比定することが可能である。つまり、1587年以前に作られ、それは1560年代まで遡る可能性もある。しかし、一つ問題がある。それは、草積の資料に混ざっている可能性のある日本産材料の資料が原城跡出土資料である点である。原城跡出土資料は、前述のように島原の乱の際に籠城中のキリシタンが作ったとされる資料である。よって、その製作年代は島原の乱開戦の1637年から終戦の1638年までの間に限られる。そうすると前述のヴェロニカのメダイの時期とそぐわなくなる。そこで、考えられるのは、十字架を作るために溶かした鉄砲玉もしくは鉛の他の製品は島原の乱以前のものである可能性があり、さらに言えばそれはどこまででも遡りうるということである。したがって、草積の資料の時期認定においては、混ざっている日本産材料よりは、より近い関連のある朝鮮半島産材料との関係を重視し、草積のヴェロニカのメダイは1587年以前と位置づけておきたい。

## 7 まとめ

以上、草積の新発見資料について検証してきたが、最後に再度整理しておきたい。

まず形態については、円形で、大きき的にはこれまで発見されているヴェロニカのメダイとほぼ同じである。もともと紐やチェーンを通すための鈕(環)があったものがとれたもの考えられる。

次に図像については、ヴェロニカの面は、キリストの頭には茨の冠がのり、背後のヴェールは矩形で、しわの表現は認められない。一方の聖母子像の面は、向かって右側に聖母マリアが表現され、左側に幼子のキリストを抱く。この表裏の図像構成はII類に分類され、日本で確認されている典型的なヴェロニカのメダイの図像構成である。

化学組成については、蛍光X線分析の結果、錫 77.0%、鉛 23.0%でいわゆる錫を主体とした錫鉛製であり、その素材産地については、朝鮮半島産材料と日本産材料の混合している可能性がある。よって、このメダイの製作地は日本である。

このメダイが作られた時期については、天草、博多と素材、形態的に近いことから関係性が認められ、さらに国内製であることから 1587 年以前の可能性が高く、1560 年ごろまで遡る可能性もある。

この平戸草積に近いところでは、飯良町や根獅子町で鉛製のキリスト・マリアメダイ 2 点（図 6-3・5）と府内型メダイ 2 点（図 6-1・2）、聖遺物入 1 点（図 6-4）等が確認されている。キリスト・マリアのメダイは素材産地が分からないものの、鉛製で国内製である可能性が高いこと、さらに府内型メダイは国内製であることなどを鑑みると、この周辺には布教期初期の国内製メダイが多く伝世されていることが看取される。今後同じような初期の資料がさらに確認されることが期待できる非常に重要な地域である。

#### 謝辞

本稿を成すにあたり、以下の諸先生・諸氏・機関には様々なご教示・ご助言・資料提供を賜りました。

心よりお礼申し上げます。

大石一久 川上茂次 中村省三 平尾良光 三浦麻衣子

天草ロザリオ館 天草市 神戸市立博物館 帝京大学 福岡市埋蔵文化財センター

南島原市教育委員会

（五十音順 敬称略）

#### 註

- 1 メダイの表記については、近年「メダル」として表記すべきとする意見もあるが、本稿で取り扱う豊後府内出土資料が重要文化財に指定され、メダイと表記されていることから、本稿ではメダイとして統一する。
- 2 当時の戦禍の状況から窮地に立たされたキリシタン達が鉛玉を溶かした可能性も考えられるが、貴重な鉄砲玉を溶かさずに鉄砲玉の材料として持っていた鉛をそのまま溶かした可能性も十分に考えられる。
- 3 正確にというのは、年号が刻まれたメダイには、復刻版があることが確認されており、必ずしも年号イコール製作年ではないことはよくある。
- 4 松田毅一・川崎桃太郎 2000 『完訳フロイス日本史』大友宗麟篇Ⅱ第 27 章第 1 部 47 章 中公文庫
- 5 あくまで、アルメダイがヴェロニカメダイを携えていた可能性を指摘しているのであって、1588 年までフロイスの記録ではヴェロニカのメダイの記述が出てくることから、他の宣教師もヴェロニカのメダイを携えていたことは言うまでもない。



※写真は原寸の約2倍

図1 平戸草積発見のヴェロニカのメダイ (右写真は画像が見えやすいよう調整)



図2 確認されているヴェロニカのメダイ

- ①：平戸草積（個人蔵）
- ②：豊後府内〔中世大友府内町跡第13次調査区〕  
（大分県立埋蔵文化財センター蔵）
- ③・④：天草（個人蔵 天草ロザリオ館寄託）
- ⑤：島原（神戸市立博物館蔵）
- ⑥：博多〔博多遺跡群第111次調査区〕（福岡市埋蔵文化財センター蔵）

※写真はほぼ原寸の約1.5倍



※写真はほぼ原寸大

図3 天草伝世ヴェロニカのメダイとキリスト・マリアメダイの組合せ



※写真はほぼ原寸大

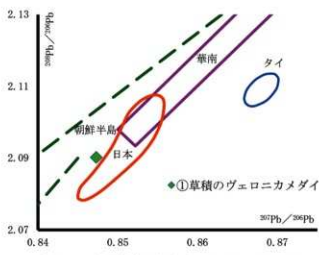
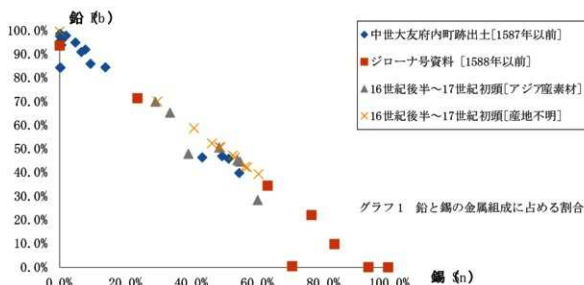
図4 博多遺跡群出土キリスト・マリアのメダイと鍔型の組合せ

図5 豊後府内出土の指輪

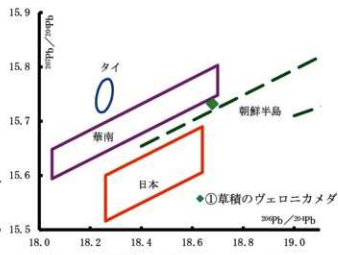


※写真はほぼ原寸大

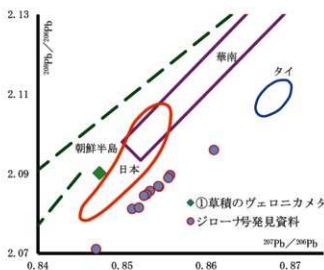
図6 平戸市飯良町・根獅子町伝世のキリシタン遺物



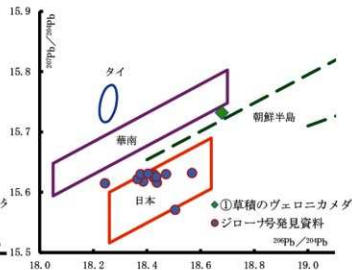
グラフ2 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )



グラフ3 鉛同位体比分布図 ( $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

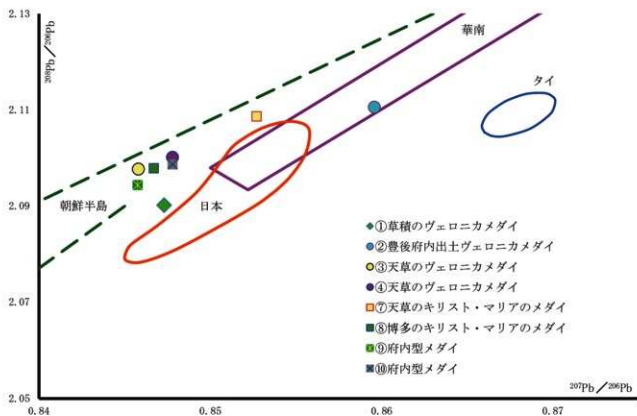


グラフ4 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

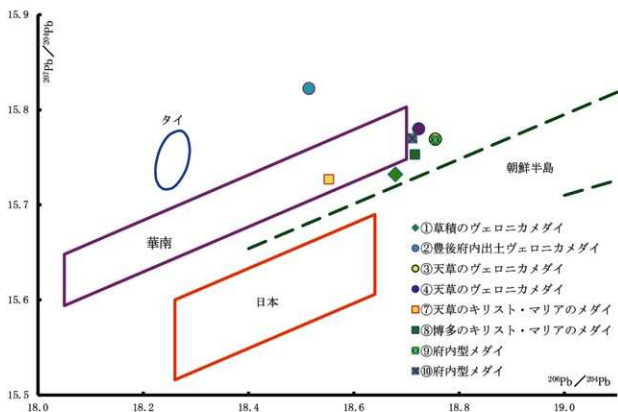


グラフ5 鉛同位体比分布図 ( $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

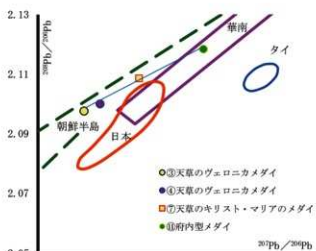




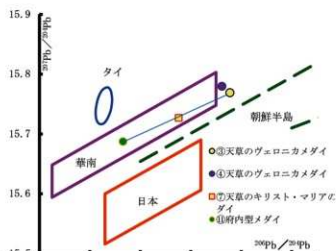
グラフ 6 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )



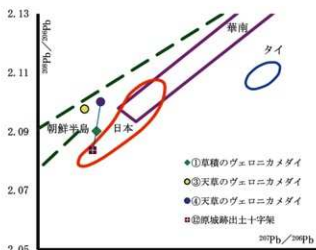
グラフ 7 鉛同位体比分布図 ( $^{206}\text{Pb}/^{203}\text{Pb}$  -  $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )



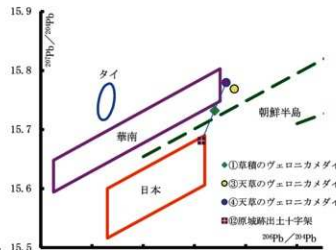
グラフ 8 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$  -  $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ )



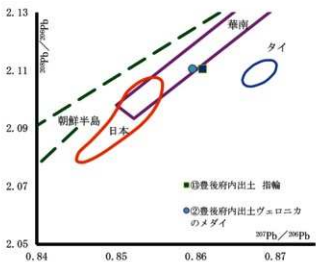
グラフ 9 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$  -  $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ )



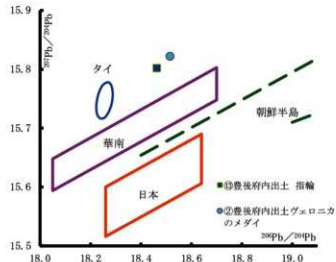
グラフ 10 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$  -  $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ )



グラフ 11 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$  -  $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ )



グラフ 12 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$  -  $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ )



グラフ 13 鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$  -  $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ )

表1 ヴェロニカのメダイ キリストマリアメダイ

番号	写真	出土 状況	出土遺跡 発見地・出所	図像				サイズ				穿 孔	製 作 地	所 蔵
				主 題	分 類	主 題	分 類	長 径 cm	短 径 cm	厚 さ cm	重 量 g			
①		伝世資料	長崎県平戸市 草積在住中村 省三氏所有	ヴ ェ ロ ニ カ	Ⅱ 類	聖 母 子 像	Ⅱ 類	1.88	1.6	-	-	不明	日本	個人蔵 長崎県平戸 市草積在住 中村省三氏 所有
②		出土資料	中世大友府内 町跡第13次調 査区 土坑 (SK011)	ヴ ェ ロ ニ カ	Ⅰ 類	聖 母 子 像	Ⅰ 類	2.0	2.0	0.2	2.0	不明	日本製 オ ー ア ジ ア 製	大分県立埋 蔵文化財セ ンター
③		伝世資料	天草個人蔵	ヴ ェ ロ ニ カ	Ⅱ 類	聖 母 子 像	Ⅱ 類	1.95	1.97	0.22	3	不明	日本	個人蔵 天草ロザリ オ館寄託
④		伝世資料	天草個人蔵	ヴ ェ ロ ニ カ	Ⅱ 類	聖 母 子 像	Ⅱ 類	1.94	1.94	0.22	3.4	無し	日本	個人蔵 天草ロザリ オ館寄託
⑤		伝世資料	島原譲渡品	ヴ ェ ロ ニ カ	Ⅱ 類	聖 母 子 像	Ⅱ 類	2.4	1.9	0.2	4.39	横 穿 孔	日本	神戸市立博 物館
⑥		出土資料	博多遺跡群第 111次調査(博 多区奈良屋町 の旧奈良屋小 学校跡地) Ⅱ区 土壌 (SK20)	ヴ ェ ロ ニ カ	Ⅱ 類	不明	-	1.8 (5.5 以内は 鋳造のサ イズ)	- (4.0)	- (1.3)	-	横 穿 孔	日本	福岡市埋 蔵文化財セ ンター

蛍光X線分析							鉛同位体比					
素材	Cu銅	Zn亜鉛	Sn錫	Pb鉛	Asヒ素	Fe鉄	領域	206pb/204pb	207pb/204pb	208pb/204pb	207pb/206pb	208pb/206pb
錫・鉛製	-	-	77.00%	23.00%	-	-	朝鮮半島産材料と日本産材料混合	18.6790000	15.7320000	39.0430000	0.8422	2.0902000
鉛(錫)製	1.07%	-	13.86%	84.53%	0.09%	0.45%	不明	18.5148928	15.8223456	39.0767167	0.8545740	2.1105559
錫・鉛製	0.33%	-	48.30%	50.64%	0.60%	0.14%	朝鮮半島	18.7550000	15.7690000	39.4810000	0.8408000	2.0977000
錫・鉛製	0.41%	-	33.42%	65.35%	0.69%	0.11%	朝鮮半島	18.7231951	15.7797997	39.3217525	0.8427942	2.1001625
錫・鉛製か	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表2 キリシタン関連遺物

番号	写真	出土 状況	出土遺跡 発見地・出所	図像		サイズ				穿 孔	製 作 地	所 蔵
				主 題	主 題	長 径 cm	短 径 cm	厚 さ cm	重 量 g			
㉗		伝世資料	天草個人蔵	マリア半身像	キリスト半身像	3.02	2.09	0.26	6.2	不明	日本	個人蔵 天草ロザリオ館寄託
㉘		出土資料	博多道群第111次調査区 (博多区奈良屋 小学校跡地) IV区 包含層 G-3区 1層	マリア半身像	キリスト半身像	3.2	2.3	0.3	-	不明	日本	福岡市埋蔵 文化財セン ター
㉙		出土資料	中世大友府内 町跡第41次調 査区 包含層	不明	幾何学文様	2.16 (1.2 )	1.68	0.4	7	横 穿 孔	豊 後 府 内	大分県立埋 蔵文化財セ ンター
㉚		出土資料	中世大友府内 町跡第77次調 査区 Y60 S601一括	無し	無し	2.15	1.75	0.25	3.5	不明	豊 後 府 内	大分県立埋 蔵文化財セ ンター
㉛		出土資料	中世大友府内 町跡第12次調 査区	無し	無し	2.4	2.2	0.3	9.7	正 面 穿 孔	豊 後 府 内	大分県立埋 蔵文化財セ ンター
㉜		出土資料	原城跡	-	-	2.4	1.95	0.5	6.022	-	日 本	南有馬市教 育委員会
㉝		出土資料	中世大友府内 町跡第43次調 査区	無し	無し	2.3	1.9	-	-	-	海 外	大分県立埋 蔵文化財セ ンター

蛍光X線分析							鉛同位体比					
素材	Cu銅	Zn亜鉛	Sn錫	Pb鉛	Asヒ素	Fe鉄	領域	206pb/204pb	207pb/204pb	208pb/204pb	207pb/206pb	208pb/206pb
錫+鉛製	0.28%	-	53.85%	45.20%	0.43%	0.23%	華南産材料と朝鮮半島産材料の混合	18.5524533	15.7269279	39.1213925	0.8477007	2.1086911
錫+鉛製	0.18%	0.54%	54.61%	44.66%	-	-	朝鮮半島	18.7160000	15.7530000	39.2640000	0.8417000	2.0979000
鉛(ヒ素)製	0.91%	-	0.13%	84.38%	13.79%	0.79%	朝鮮半島	18.7547745	15.7682006	39.2800353	0.8407566	2.0944019
純鉛製	<0.1	-	7.80%	92.00%	<0.1	0.60%	朝鮮半島	18.7110000	15.7700000	39.2680000	0.8428000	2.0987000
純銅製	96.60%	-	0.10%	1.70%	0.10%	1.70%	華南	18.3309525	15.6873253	38.8340641	0.8557834	2.1184968
鉛・錫製	-	-	-	-	-	-	日本	18.6280000	15.6810000	38.8150000	0.8418000	2.0837000
錫+鉛製	0.11%	-	57.78%	40.27%	0.05%	1.79%	不明	18.4632240	15.8018984	38.9666377	0.8558580	2.1105002

# 松尾城跡出土の挽き臼

植田 紘正

## 1 はじめに

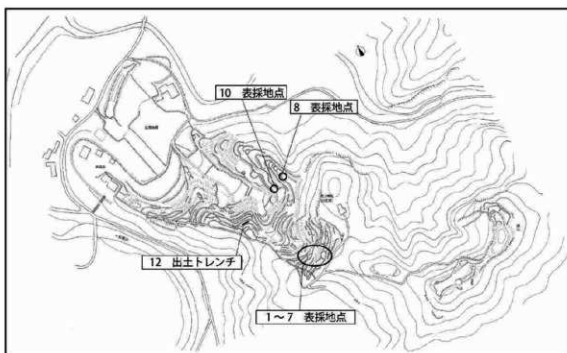
挽き臼類が中世城館から出土することがある。城館の発掘調査成果を報告する際に、いくつかの可能性について言及することはあるが、日下部善巳氏らのように、城跡から出土した挽き臼を主題に検討する事例は少ない。しかし、挽き臼は使用石材や摺目など、地域性を反映する要素<sup>1)</sup>を持ち、城館研究の大きな手掛かりになりうる。また、近い時期の挽き臼がまとまって出土している事例として、挽き臼の流通や製作の実態を把握するための位置資料として整理する必要がある。そのため、本稿では松尾城跡で見つかった、未報告資料を中心に情報を整理する。

## 2 松尾城跡について

豊後大野市三重町に所在する松尾城跡と呼ばれる山城である（第1図）。この山城は、天正14年（1586年）に島津氏が豊後侵攻の拠点として広福寺周辺を整備したものである。山頂は物見やぐら、坊跡と思しき谷間を兵の駐屯地、籠の寺を本陣として利用したと考えられる（第2図）。島津氏が豊臣秀吉の九州征伐によって豊後から撤退する際に、城を燃やして破却しているため、存続時期が非常に短い。また、貿易陶磁器類が大量に見つかっており、その型式から16世紀後半～16世紀末に持ち込んだ可能性が示唆されている（玉水・吉田2004）。この城から、粉挽き臼や茶臼が12点見つかっている。



第1図 松尾城跡の位置図（国土地理院「三重町」と色別標高図に加筆、縮尺は任意）



第2図 松尾城跡における挽き臼の表探・出土地点（大分県教委 2004 の縄張図を加筆）

### 3 出土した挽き臼について

今回は、豊後大野市教育委員会が所蔵する挽き臼を観察した。各挽き臼の詳細については表1・第3図～第14図の通りである。茶臼の破片が3点、他はすべて粉挽き臼で、完形のものではなく、半分以下の大きさまで割れている。いずれも、表面から破断面にかけて斑に被熱した痕が残っていることから、火災などにより一括して被熱した可能性があり、それによって破損したと考えられる。また、他の生活用品と共に兵の駐屯地と思しき谷の頂部で見つかっている。摺目は九州に多い6分画のみで、茶臼は砂岩を使い、粉挽き臼は凝灰岩で、松尾城跡周辺で産出する石材を使用していることから、大野郡辺りで製作されたと考えられる。

番号	種類	部位	溝				法量 (cm/g)		石材	残存状況	出土状況	備考
			主溝	副溝	直径	厚さ	軸穴					
1	茶臼	下臼	6	7~8	(30)	(12)	2	砂岩	1/2	表探	被熱	
2	粉挽き臼	上臼	-	-	-	-	-	凝灰岩	端部	表探	被熱	
3	粉挽き臼	上臼	-	-	-	-	-	凝灰岩	端部	表探	被熱	
4	粉挽き臼	上臼	6	-	-	-	-	凝灰岩	1/2	表探	被熱	
5	粉挽き臼	下臼	6	-	-	-	-	凝灰岩	1/2	表探	被熱	
6	茶臼	-	6	-	-	-	-	凝灰岩	端部	表探		
7	粉挽き臼	上臼	-	-	-	-	-	凝灰岩	端部	表探	被熱	
8	粉挽き臼	上臼	-	-	-	-	-	凝灰岩	1/3	表探	被熱	
9	粉挽き臼	-	-	-	-	-	-	凝灰岩	端部	表探	出土地点不明	
10	粉挽き臼	上臼	-	-	-	-	-	弱溶結凝灰岩	端部	表探		
11	粉挽き臼	下臼	-	-	-	-	-	凝灰岩	端部	表探	豊後大野市教委 2011記載	
12	茶臼	受重	-	-	-	-	-	砂岩	端部	トレンチ		

第1表 松尾城跡で見つかった挽き臼の一覧表



#### 4 考察

松尾城跡で見つかった挽き臼のほとんどが表採品だが、一括して被熱した可能性があり、同じく城内で見つかった16世紀頃の被熱した貿易陶磁器類と同じ時期に破棄された可能性がある。そのため、島津氏が松尾城を拠点としていた時期に使用され、松尾城を退去する際に廃棄されたものと考えられる。

また、挽き臼の摺目は使用されたことですり減っている様子も確認できたため、元々地元住民が使用していた粉挽き臼を徴収し、広福寺を接収した際に茶臼も確保したと考えられる。その用途としては、兵糧の調理が考えられるが、同じ用途で使う擂鉢も数点見つかっており、重量のある挽き臼を調理のためだけに山城の中腹まで運ぶ必要性があったのか疑問が残る。また、茶臼に至っては、喫茶文化を嗜む上流階級は、麓の寺に布陣していたとみられるため、兵の駐屯地であった山頂部で見つまっていることの説明がつき難い。そこで、他の用途として火薬の製造が挙げられる。16世紀頃には鉄砲は普及しており、火薬の製造には挽き臼が必須となる。主な火薬の材料になる硫黄は豊後国内で産出し、硝石は侵攻先の豊後府内で調達できる。また、火薬は容易に入手し難い重要物資であるため、山城内で生産していた可能性がある。このように、城跡から出土した挽き臼は、火薬製造のため、持ち込まれた可能性について言及する研究者（三輪1987ほか）もいるが、原料が付着した挽き臼など、確たる証拠といえる資料を見いだせていないため、本件も可能性の一つとして提示する。

#### 5 おわりに

以上、松尾城跡で見つかった挽き臼の傾向や用途について検討したが、明確な見解を得ることができなかった。今回扱った松尾城跡以外にも安岐城跡（国東市）からも挽き臼がまとまって出土・表採されていることが報告されている。そのため、今後も城跡から出土した資料を集成し、城館における挽き臼利用の実態について明らかにしたい。

#### 【謝辞】

松尾城跡でみつかった挽き臼の資料調査では、豊後大野市教育委員会の諸岡郁氏、長屋住歩氏と大分県立埋蔵文化財センターの諸岡初音氏にご協力いただきました。また、成稿にあたり、大分県立埋蔵文化財センターの横澤恵氏、綿貫俊一氏にご助言いただきました。記して感謝いたします。

※挽き臼No.7の実測図とNo.7とNo.5の拓本を諸岡初音氏が作成し、No.11とNo.12は豊後大野市教育委員会の報告書から引用した。その他、実測図と拓本、写真は筆者が作成した。

【参考文献】

拙稿 2021 「豊後府内出土の挽き臼」『滋賀県立大学考古学研究室論集 1—考古学研究室 25周年・中井均先生退職記念—』滋賀県立大学考古学研究室

芦刈政治 1986 「島津軍進攻と三重郷松尾城」『大分縣地方史』第 122 号 大分県地方研究会

佐々木健策 2018 「挽き臼類の展開にみる中世」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 210 集 国立歴史民俗博物館

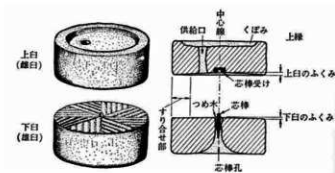
王永光洋・吉田寛 2004 「424 松尾城 大野郡三重町大字松尾」『大分の中世城館 第四集 総論編』大分県教育委員会

三輪茂雄 1978 『臼』ものと人間の文化史 25 法政大学出版局

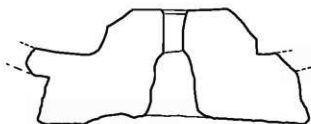
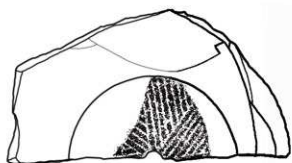
日下部善巳 1981 「城館跡出土の石臼類について（予察）—福島県内城館発掘調査の成果より—」『福島考古』第 22 号 福島県考古学会

豊後大野市教育委員会 2011 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書 2 平成 21 年度調査』

<sup>1</sup> 三輪氏をはじめとする挽き臼の研究では、穀物等の製粉に用いる「粉挽き臼」と、茶道に用いる「茶臼」に分けている。後者は嗜好品であることから、通常の挽き臼と様相が異なるため、本稿でも既存の研究と同様に区別する。また、部分名称は三輪茂雄氏が提唱したものを引用する。



<sup>11</sup> 挽き臼の目のパターンは、区画の数が地域によって異なることが、三輪氏の研究によって明らかになっている。それによると、九州は6分画が中心であり、畿内を中心とする本州は8分画が中心を占めているとしている〔三輪1978〕。

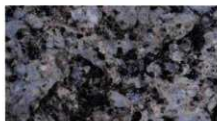


0 1cm 20mm



表面の接写写真

第3図 No.1 茶臼 (実測図、写真) S=1/8



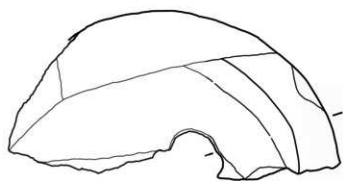
表面の接写写真



第4図 No.2 挽き臼 (実測図、写真) S=1/8



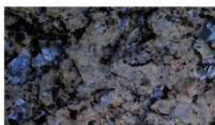
第5図 No.3 挽き臼 (実測図、写真) S=1/8



0 1:8 20 μm



断面写真



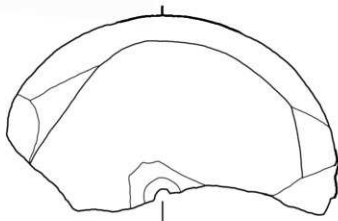
表面の接写写真

第6図 No.4 挽き臼 (実測図、写真) S=1/8

5



断面写真



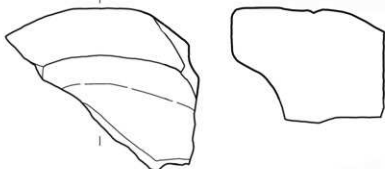
0 1:8 20 μm



第7図 No.5 挽き臼 (実測図、写真) S=1/8

表面の接写写真

第8図 No.6 茶臼 (写真)



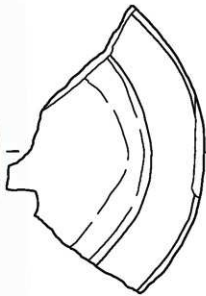
第9図 No.7 挽き臼 (実測図、写真) S=1/8



0 1:8 20 cm



第10図 No.8 挽き臼 (実測図、写真) S=1/8





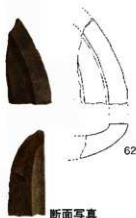
表面の接写写真

第11図 No.9 挽き白 (写真)



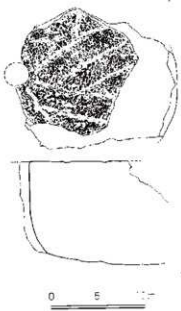
表面の接写写真

第12図 No.10 挽き白 (写真)



断面写真

第14図 No.12 茶白  
(写真、実測図) S-1/8



第13図 No.11 挽き白 (写真、実測図) S=1/8



## 願成院の密教仏画 2 - 十二天像 -

綿貫 俊一

### 序

愛宕山願成院(住職:後藤幸雄)は、高野山真言宗に属する寺であるが、ここに大量の仏画が存在することが分かったのは2006年(平成18)の5月頃に行われた熊本県立美術館の調査からである(註1)。しかし、その後も大分県内の研究者にも知られることなく、年に2回程度数幅の仏画が願成院の催事に併せて本堂の愛染堂内に数幅掲げられたほか、地元の竹田市歴史資料館で数年に1回公開されるだけであった。私自身は、2019年の3月になって、尋常ではない数量の仏画が願成院に所蔵されていることを知ったが、なにしてる住職でさえ全貌を把握しきれていない現状であった。その最初の調査で圧倒的数量の仏画とともに、それらに酷い虫食いやシミが随所に観察され、極めて劣悪で危機的な状況にあることも知った。住職の後藤幸雄師による説明からは、貴重な仏画等の寺宝を後世に伝えるとともに、願成院を盛り上げたいという思いがひしひしと伝わってきたこと覚えている。丁度、竹田市は歴史資料館の建て直しリニューアル事業を控え、多忙な状況にあった。そこで私は、願成院における喫緊の課題が仏画の保存・保管にあることから、あれこれと考え、ネットワークの軽い大分県立埋蔵文化財センターで一時的に展示・保管することを考えた。

このような経緯で2019年の8月に借用、そして12月からコロナによる翌年3月の中断を挟んだ5月まで特集展『密教仏画の至宝』という題で第1回の展示会を行った。その後、2021年(令和3)1月から3月に行った特集展Ⅱ『密教仏画の至宝Ⅱ』、2021年(令和3)6月から7月に行った特集展Ⅰ『密教仏画の至宝Ⅲ』を順次開催し、コロナ禍でありながら多数の来館者があるなど、好評を博した。

この展示に際し、課題となったのが願成院所蔵の仏画が美術史のなかでどのような意味と位置を占めるのかという点であった。そこで願成院が所蔵する仏画を中心とした調査・研究を続けたところ、中世に遡る大元帥明王像甲本や五大明王像甲本のほか、近世の京都長谷川派の作になる多数の仏画群が確認できた。また描かれた尊像は完成度が高く、例えば京都などの職業絵師によって描かれたものも多く含まれていた。こうした研究成果を報告したところ、県外研究者から京都より遠く離れた大分県の寺で長谷川派の仏画が大量に残っていたことに對し、驚きをもって受け止めていただいた。

願成院愛染堂が所蔵する仏画については、既に一部を報告したものの、まだ十分ではない。そこで今回は、天部の中で十二天像について報告する。

(註1)平成18年春、熊本県立美術館の調査の報告は未刊ながら、願成院と竹田市教育委員会に写真添付の目録が残る。

### 1 天部

#### (1) 十二天

十二天像は、帝釈天、火天、焰摩天、羅刹天、水天、風天、毘沙門天、伊舎那天、梵天、地天日天、月天で構成されるが、元々インドや西アジアの神々が善神として仏教に取り込まれたものである。この善神が十二天として構成される場合、方角を護る意味で用いられる。密教の修法や儀式を執り行う道場の壁に掛幅仕立ての十二天像をかかけたり、壁際に屏風仕立ての十二天像を配置したりする。また真言宗で護摩を執り行う際に世天壇として供養し、また大壇と正學壇との境に十二天屏風を用いる場合もあるようである。このように常時ではなく、ある一定の日を決めて行う行事に使用される十二天像は掛軸や屏風として描かれたものが多い。



願成院の十二天像は、十二幅一具の掛軸として甲本・乙本・丙本がある他、十二幅揃っていない丁本・戊本、また左隻と右隻からなる六曲一具の屏風、さらに六角堂能満院で刷られた版本(版画)からなる。このように多数の十二天像が遺存する背景には、十二天像が使用頻度の高い仏画であったこと、今日の願成院が迎ってきたことが大きく影響している。

**甲本** 十二天像の甲本は、本紙94.4cm(縦)・45.4cm(横)前後の規模をもつ絹本着色の作例である。頭光は共通して、幅狭い外縁部分が金泥、内側が憲法黒茶色の和色で共通し、焰光の火天を除く緑緑いに挿らめく短い葡萄色の火焰が鋭く緊張感をだしている。

伊舎那天は、頭に宝冠をかぶり、第三の眼をもつ尊顔は右前方を向き、右手に三叉戟、左手に血の入った金色の劫波杯をもち、毛氈座の上に草履を履いて立つ(写真1)。首につけた璽珞には頭蓋骨を付け、皮膚の色が緑色系の木賊色をした緑青であることが特徴である。肩から毛氈座付近まで天衣を垂らし、白い天冠帯は腰付近まで翻るように下がる。下半身には裳と腰布を付けている。天衣の色は、表が赤紫系の真紅で、裏が白である。この天衣の表側で真紅の表面に僅かに間隙をあけて緑取りを加えた金色の松笠文が描かれており、同様の松笠文は願成院本不動明王像甲本(長谷川賀一郎作)の条帛にもみられる(写真69-5)。

帝釈天は、頭に角型の宝冠をかぶり、第三の眼をもつ尊顔は正面を向き、右手に独鈷杵、左手に八棧鏡をもち、沓を履き荷葉座の上に立つ(写真2)。外褌衣の袖や裳は青色を地色とし、白い顔料で鳳凰、金泥で雲形の文様などを配する。特に松笠文様は、長谷川賀一郎等叔作の願成院所蔵不動明王像甲本に描かれた尊像の条帛にも表現される。外褌衣の袖の表側で真紅の表面に緑取りを加えた金泥による松笠文が描かれているが、願成院蔵不動明王像甲本(長谷川賀一郎等叔作)の条帛にも同じ松笠文がみられる。

火天の像様は、右斜め上方を向き、手は四臂で、右側第一手:三角智印、右側第二手:数珠 左側第一手:仙杖、左側第二手:錘持などを持ち、毛氈座の上に裸足で立つ(写真3)。風貌は、鬚をつけていない白髪の仙人、または痩せた老人の風貌をする。白い頭髮・鼻髭・顎髭の挿らめきが細かに描かれており、後ろ方向からの風を感じることができる表現に成功している。また、火の化身を象徴するように背後の足元から頭上にかけて大きく火焰をグラデーションで表現するなど、長谷川賀一郎等叔の特徴と同じである。また火焰が頭光を包むように燃え盛る表現が特徴。上半身には、璽珞の他に条帛をつけ、下半身は裳を履き、その上に腰布をつける。

焰摩天の像様は、左斜め前方を向き、左手に檀拏幢(人頭杖)、右手は屈して手の平を前に出し、踏割蓮華座の上に立つ(写真4)。体の上半身には、条帛をまとい、下半身には裳をはき、その上半の表側で真紅地の表面に獅子が描かれた腰布をつける。裳の表側は白地で、表面には龍が描かれている。檀拏幢の尊顔は目を閉じている。焰摩天と檀拏幢の尊顔は穏やかで、頭に鬘を結び天冠を付け、体の皮膚は赤くグラデーションで陰影を表現している。なお地天の踏割蓮華座の彩色は、右が赤系色、左が緑系色であり、同じ踏割蓮華座の地天・日天・月天が同色であるのと違っている。

羅刹天の尊顔は、右斜めを向きながらも正面を忿怒の貌で見据える(写真5)。その頭部は焰髪で、間に小さな天冠を被る。天冠には天冠帯が付き、肩付近の背後から上に S 字状に翻る。右手に日本刀を持ち、左手の指は刀印を結び、裸足で毛氈座の上に立つ。足の指は、端部が上に反り返るように踏みしめる。外褌衣の上に胸甲を付け、帯巻で締める。その下から下半身側にかけて前盾を付ける。下半身には腰甲、その下に裳、さらにその下に袴をつける。袴の下に隠れるように脛がみえる。また胸甲と腰甲の境界、腰甲と裳の境界付近には毛皮があり、腹部部の前盾をバツル状に表現した獅嚙がある。なお、腰甲には表面に毘沙門亀甲という金地の紋様が表現されている。毘沙門亀甲については、裳の表面にも赤と朱色で描いたものが表現されている。皮膚の着色については、他の作例では皮膚がピンクも多いが、本例は赤い色をしている。

水天像は、一面二臂で、尊顔は左斜め前方を向き、頭に五龍冠、右手に寶劍、左手に龍索をもち、青海波上



写真1 伊舍那天像(十二天像甲本)



写真2 帝釈天像(十二天像甲本)



写真3 火天像(十二天像甲本)



写真4 焰摩天像(十二天像甲本)



写真5 羅刹天像(十二天像甲本)



写真6 水天像(十二天像甲本)

の亀座の上に立つ(写真6)。五龍冠の背後には天冠帯が付き、体の前側で両腕に載せ腰付近にまで垂らす。髪は巻髪で、天冠帯と角のある五匹の龍を付けた五龍冠をはめている。龍索の龍は、角のない龍のような索である。また皮膚は濃い青黒いというべき百入茶色で、天衣と条帛、下半には腰布、裳、袴を身につけている。文様は、天衣:唐草、条帛:松笠文、裳:赤と朱色で描いた毘沙門亀甲をあしらう。

風天像は、一面二臂で、左方向へ進むように右足を踏み出しながら、右斜め後方を振り返る姿勢をとる(写真7)。尊顔は右斜め後方を優いまなざしで余裕たつぷりに振り返る。頭に天冠、右手は風天印で、左手に風で翻る幡と頂部の皿に風輪を付けた幡幡(旗の仏具)をもちながら左肩に立てかけ、毛氈座の上に立つ。また上半身に外襦衣を着、下半身に裳をはいた後、肩甲、胸甲、腰甲を付ける。外襦衣の袖には獅子が描かれる。なお指先が鉤爪状となった毛皮のブーツをはく。

毘沙門天は、左前方向を虎視する姿勢で、両足に草履を履き正面への字形に開いて真紅地に獅子をあしらった毛氈座に立つ(写真8)。頭に羽飾りの付いた兜を被り、上半身には外襦衣、下半身には裳、袴を付ける。その上に肩甲、胸甲、腰甲を付け、袴の下には脛当を装着する。腰甲の上に毛皮、その上を腹帯部の前盾をバツクル状に表現した獅噛がある。左手に宝塔、右手に寶棒をもつ。甲冑や脛甲の下端にある赤白青緑の連続する配色や、肉付きの良い豊満な顔でギョロとした吊り上がり目などは、長谷川賀一郎等叔の作風に酷似する部分である。

梵天は、四面三眼四臂で、正面の顔が僅かに右斜め前方向を見る姿勢で、荷葉座に裸足でハの字形に開いて立つ(写真9)。各頭部には、鬘を結び、天冠をはめ、それに付く天冠帯が正面頭部の背後から下半身の両側付近まで延びる。左手第一手に開敷白蓮華、左手第二手に水瓶、右手第一手は印、右手第二手は三叉戟をもつ。肩付近に掛けた天衣は両腕を経て荷葉座付近に垂らす。上半身には条帛、下半身に腰布、裳、袴をつける。そのほか体には、璽珞、腕釧、臂釧などの装飾品を身につける。腰布の上部に龍、下半に松笠文が描かれる。

地天は、堅牢地神と呼ぶ場合も多く、一面二臂の姿をしている。本例は、左斜め前下方向の鉢を見る姿勢で、雲座上の踏割蓮華座に裸足で立つ(写真10)。頭には鬘を結ったうえで天冠をはめ、それに付けた天冠帯は両肩上方でS字状に翻る。肩付近から足下にかけて天衣が曲線的に延びる。腰からは、袴、裳、腰布を身につける。腰布の上部に松笠文、裳に鳳凰が描かれている。そのほか体には、璽珞、腕釧、臂釧、足釧などの装飾品を身につける。多くの地天の像では、左手に諸物生成の徳を表すとされる鮮華を入れた鉢を持つが、これは竹で編んだようなすかしのある浅い皿状の入れ物になっている。右手は印である。

日天は、太陽(日輪)を神格化した神で、観世音菩薩の化身の一つという。本例は、右斜め前方向を見る姿勢で、雲座上の踏割蓮華座に裸足で立つ(写真11)。足の位置もその方向に向けてハの字状に開く。頭部には、鬘を結び、天冠をはめ、それに付く天冠帯が正面から両腕を経て腰周辺で翻る。下半身の両側付近まで延びる。肩付近から足下にかけて天衣が曲線的に延びるほか、上半身には条帛を付ける。腰からは、裳、腰布を身につける。左手に薄紅い二花の開敷蓮華、右の手の平には金色で鳳凰のような三足鳥(註1)が入った太陽を象徴する赤い日輪を掲げる。上半身には条帛をつける。真紅地の裳の表面に鳳凰が描かれている。そのほか体には、璽珞、腕釧、臂釧などの装飾品を身につける。

月天は、月やその光明を神格化した神といわれる。多くの例で、月天像は、左側を向き、両手で台を捧げ持ちながら台に載せた月輪内の兎をみる場合が多い。この月天像も同様で、雲座上の踏割蓮華座を左横向きに立ち、手に持つ台上に山々を表現し、その上に乗せた月を象徴する銀色(白色)の月輪を捧げ持つ(写真12)。そして中の兎を優い眼差しでみている場面である。足は、左斜め前方を向きながらハの字状に開くが、顔は捧げ持つ月輪の方向を向く。頭部には、鬘を結び、天冠をはめ、それに付く天冠帯が正面から両腕を経て腰周辺で



写真7 風天像(十二天像甲本)



写真8 毘沙門天像(十二天像甲本)



写真9 梵天像(十二天像甲本)



写真10 地天像(十二天像甲本)



写真11 日天像(十二天像甲本)



写真12 月天像(十二天像甲本)

翻る。下半身の両側付近まで延びる。肩付近から足下にかけて天衣が曲線的に延びるほか、上半身には条帛を付ける。腰から下は、腰布、裳を身に着ける。そのほか体には、璣珞、腕釧、臂釧などの装飾品を身に着ける。

小結 寛政4年(1792)に長谷川賀一郎等叔作の不動明王像甲本をみると、火焰の曲線的な部分から直線的な部分での赤色から微かな淡い赤の自然なグラデーション、足の甲の浮腫み状の表現、足指端部の踏みしめと反り上がり表現の特徴がある。この不動明王像甲本の特徴は、十二天像甲本に見られる顔や足の表現、火焰頭光の色使いなどの作行は同じである。したがって十二天像甲本は、長谷川賀一郎等叔の作である可能性もてくる。また重要な特徴として、目の周辺、首の三道周辺、指と指間などの凹部や腕や足の中央部から半分側等に陰影を付け立体感を出していることが挙げられる。

註1 中国の初期神話『楚辞』、日本や古代朝鮮・高句麗などの建国神話に登場する太陽の化身

十二天像乙本 乙本は、本紙88.1cm(縦)・36.6cm(横)前後の規模をもつ紙本着色の作例である。明治14年11月頃からの願成院住職を継承(願成院文書番号257・261)していた金剛智幢による箱書きには、豊後国府内領主:大給松平家6代の近傳(生誕:文暦4年3月27日(1754年5月18日)～死没:天保11年2月16日(1840年3月19日)、家督継承:明和7年(1770年)7月21日)により如意輪観音 五字文殊 五大力明王 十二天が描かれたとある。また箱蓋には、府内領の祈禱寺であった「摩尼山福壽院第九葉 了義代」との墨書の後に、「御寄附松平長門守近傳公御代 舍利五結摩理趣分等 願成院智幢」とある。福寿院を経て既に願成院に伝わっていた十二天像の箱蓋裏に備忘として書き足したと推定できる。なお智幢は(註1)、明治10年前後に父親である月鑑の後を継いで補陀洛山観音寺の住職を勤めていた(竹田市教育委員会文書1-No.260)。

伊舎那天は、三眼二臂で、髷を結った頭に璣珞と宝珠の付いた天冠をかぶり、右斜め前方を見下ろすが、足は裸足でハの字状に開きながら毛氈座の上に立つ(写真14)。右手に三叉戟、左手に血の入った金色の浅い盤状の劫波杯を持つ。首につけた璣珞には小さな頭蓋骨を付け、肉身は、肉身は僅かに緑色味が窺えるが、まぼ黒に近い藍錆茶色である。天衣の色は、表が暗い赤系で、裏が薄紅色である。下半身には腰布、裳を身につける。それらの紋様は、腰布が雲のような紋様で、裳は牡丹の様な花文に唐草文状の蔓をかいた不明瞭な図である。

帝釈天は、頭に髷を結び、宝珠と璣珞のついた王冠状の宝冠(角冠)を被る。また三眼二臂で顔は右斜め前方を向き、杵を履いた足は毛氈座上で正面に向けハの字状に開いて立つ(写真15)。右手に独結杵、左手に円形の寶鏡を持つ。着衣は外襦衣、裳、袴がみられ、その他、肩甲と胸甲のようなもの、また袈裟のようなものが描かれている。肩甲は金色で右肩だけに見られ、袈裟は緑黒い高麗納戸色をした布で、左腕から下へ垂らしている。

火天は、右斜め下方を見下ろすように向き、三眼四臂で、右側第一手:三角智印、右側第二手:数珠、左側第一手:宝瓶、左側第二手:仙杖などを持ち、毛氈座の上にハの字状の裸足で毛氈座に立つ(写真16)。髷を結った白い頭髪・鼻鬚・顎髭・弛んだ肌から風貌は仙人または老人を思わせる。頭光はなく、グラデーションで



写真13 十二天像乙本の箱書体

表現した火焔光である。上半身に条帛、下半身に腰布と裳を身に着ける。本例に第3の目があるのは異例で、類例は乙本を寫した丙本しかない。

焔摩天は、三眼二臂で左斜め前方を向き、左手に檀拏幢(人頭杖)、右手は屈して手の平を出し、裸足でハの字状に足を開いて毛氈座の上に立つ(写真17)。上半身には条帛を付け、腰から下は、腰布、裳を身に着ける。頭には鬘を結び、それに璎珞と宝珠を付けた天冠を被る。檀拏幢の顔も三眼で正面を向き、頭にも鬘を結び天冠を被る。天冠、装身具、腕釧、足釧、条帛の唐草文、裳の曲線文は金泥で描く。

羅刹天は、左斜めを向きながら足はハの字状に開きつつ下半身は正面を向く。髪は焔髪で、小さな冠を付け、右手に日本刀を持ち、左手の指は刀印を結び、靴をはき毛氈座の上に立つ(写真18)。皮膚の着色は、赤系色をしている。目つきは忿怒相をしていない。外襠衣や裳の上に胸甲・肩甲・腹甲を付けている。また裳の下に脛当が覗いている。なお腰甲の上に毛皮、その上を腹帯部の前盾をバックル状に表現しているものの極めて形骸化した獅鬚がある。天冠、装身具、腕釧、足釧、肩甲、腹帯、胸甲、腰甲、日本刀には金泥で描く。

水天像は、一面二臂で、顔と体部は前方を向き、頭に五龍冠、右手に寶劍、左手に龍索をもち、足は裸足でハの字状に開きながら毛氈座の上に立つ(写真19)。上半身には条帛を付け、腰から下は、腰布、裳を身に着ける。髪は巻髪で、白い天冠帯と角のない六匹の蛇のような龍を付けた六龍冠を被る。龍索は、僅かに角のある龍からなる。肉身はとでも暗い黄緑系の藍媚茶色に着色する。一方、腰布は皮膚に比べさらに黒く着色する。天冠、装身具、条帛、天衣の曲線文は金泥で描く。裳は青海波を暗緑色系の岩井茶色で着色している。

風天は、一面二臂で、右斜め前方へ進むように足を向けながら、同じ方向を見る姿勢である(写真20)。頭に冠はなく、その風貌は横方向に鬘を結った白い頭髪、鼻髭・顎髭・鬚から老人を思わせる。しかし、胸に胸甲、脛に脛当をつけるなど、武装もしている。右手は風で翻る幡と頂部に風輪を付けた幡幡を持ち、左手で刀印を示す。足には革製かと思われるブーツをはく。装身具、腕釧、足釧、肩甲、腹帯、胸甲、腰甲、脛当、幡幡の全部、または一部を金泥で描く。外襠衣の袖付近は赤地に直線が交差する組手文を截金でつける。

毘沙門天は、一面二臂で、革製の靴を履いた足は正面方向へハの字状に開きながら毛氈座の上に立つ(写真21)。左前方向を虎視する姿勢で、左手に金色で宝珠の入った宝塔、右手に三叉戟をもつ。頭に兜を被り、体に外襠衣と裳を付け、その上に肩甲、胸甲、腰甲を装着する。特に腰甲の上に毛皮、その上を腹帯部の前盾をバックル状に表現した獅鬚がある。裳の下には脛当が見えるなど武装している。装身具、腕釧、足釧、兜飾り、肩甲、腹帯、胸甲、腰甲、腹帯と獅鬚脛当の全部、または一部を金泥で描く。

梵天は、四面四臂で、中心の顔がわずかに右斜め前方向を見る姿勢で、毛氈座の上に裸足で立つ(写真22)。左側の顔は、描き忘れたのか額にあるはずの第三の眼がないが、他の三面には第三の眼がある。それぞれの頭部には天冠が装着され、主面では天冠帯が背後に垂れ翻る。左手第一手に鉢持(水瓶)、左手第二手に開敷蓮華、右手第一手に印、右手第二手に三叉戟ならぬ槍または矛をもつ。足は裸足で、足の甲を中心にむくんだような状況となっている。肩には天衣が架かり、足元下まで延びる。上半身には条帛、下半身には裳をはき、その上に腰布を付けている。装身具は、胸、臂、足などにつけている。

地天は、堅牢地神と呼ぶ場合も多い。本例は、一面二臂で左斜め前方向を見下ろし、それに合わせて足は裸足で、その方向に向け毛氈座の上に立つ(写真23)。頭髪は鬘を結び、璎珞を付けた宝冠を被る。左肩から右脇腹にかけて条帛、腹から腰にかけて腰布とその折返しをし、その下に裳をはいている。多くの地天の像では、左手に諸物生成の徳を表すとされる鮮華を入れた鉢を持つが、これは浅い盤に白い蓮華の花を入れている。右手は印であろう。

日天は、右斜め前方向の右掌で掴んだ白蓮華の小蓮台上の赤い日輪内に入る黒い三足の鳥を見る姿勢で、左手は印を結ぶ(写真24)。三足の鳥は羽を広げ、日天の方向を見る。足は正面を向き、ハの字状に開きながら



写真14 伊舍那天像(十二天像乙本)



写真15 帝釈天像(十二天像乙本)



写真16 火天像(十二天像乙本)



写真17 焰摩天像(十二天像乙本)



写真18 羅利天像(十二天像乙本)



写真19 水天像(十二天像乙本)



写真20 風天像(十二天像乙本)



写真21 毘沙門天像(十二天像乙本)



写真22 梵天像(十二天像乙本)



写真23 地天像(十二天像乙本)



写真24 日天像(十二天像乙本)



写真25 月天像(十二天像乙本)



毛氈座上裸足で立つ。足はむくんだ表現である。天衣は両肩に掛け、毛氈座の周辺まで垂らす。上半身の肩から斜めに条帛、下半身には裳と腰布を付ける。

月天は、一面二臂で、足は裸足で、正面方向へへの字状に開きながら毛氈座上に立つが(写真25)、顔は左掌に載せた月輪内の兎を覗き込むように左斜め前を向く。髻を結った頭髪に環珞と火焰一つ盛宝珠をつけた天冠をかぶり。右手は印を示す。足の甲付近は、他例と同様に浮腫んでいる。天衣は両肩に掛け、毛氈座の周辺まで垂らす。天冠に付けた天冠帯は、下半身付近まで翻りながら延びている。

小結 火天が火焰光である以外の十二天像を構成する因は、火焰が頭光の縁周りの三か所で小さく燃え立つ場合が多い。羅刹天、風天、毘沙門天が靴で、帝釈天が沓を履いているが、それ以外は足の甲が膨れた裸足で描かれている。すべての尊像は、毛氈座上に立っているが、このような状況は例えば東寺本「十二天像屏風」(伝宅間勝賀筆)が蓮華座の梵天を除くと全て毛氈座であることに通じる(講談社 1991)。このことから乙本の尊像全てが毛氈座であることは、十二天像で古いタイプの系列にある図像を基に描かれたのかもしれない。なお、頭光、または焰光の上端と本紙上端との間は狭く、円相などの表現はない。

註1 智輪は、古文書によれば「金剛知道」といい、仏画の墨書では、「金剛輪智」とも書かれる。元は石川姓で、月鑑の養子となる。

十二天像丙本 丙本は紙本着色の十二幅からなるが(写真27～写真37)、乙本から図像を寫し着色したものであり、ここでは四幅だけを代表させて記載する。丙本は、収納箱に収められているが、箱蓋裏に「文化九年五月了遍造之」・箱蓋表に「掛物箱 大勝院」と墨書されている。丙本は、本紙88.1cm(縦)×36.6cm(横)前後の規模をもつ紙本着色の作例である。

伊舍那天は、三眼二臂で、髻を結った頭に環珞と宝珠の付いた天冠をかぶり、右斜め前方を見下ろすが、足は裸足でへの字状に開きながら毛氈座上に立つ(写真27)。右手に三叉戟、左手に血の入った浅い盤状の劫波杯を持つ。頭髪に髻を結び、天冠を被る。天冠からは天冠帯が後方へ延び翻る。このうち天冠、三叉戟の端部、劫波杯、環珞で、本来金色と考えられる部分は黒色に変化している。首につけた環珞には形骸化した頭蓋骨が付き、肉身は濃い緑色系の色をしていることが特徴である。天衣の色は、表が暗い赤系で、裏が薄紅色である。上半身には、天衣の他に条帛を付け、腰から下の下半身には、裳と腰布を付けている。なお別紙に円相を描き、中に伊舍那天の種字を記し、円形の外縁に沿ってきりとったものを頭光の上方へ貼り付けている。

帝釈天は、頭に髻を結び、火焰宝珠と環珞のついた角冠状の宝冠を被る。また三眼二臂で顔は右斜め前方を向き、沓を履いた足は毛氈座上で正面に向けへの字状に開いて立つ(写真28)。右手に独結杵、左手に円形の寶鏡を持つ。なお別紙に円相を描き、中に帝釈天の種字を記して、円形の外縁に沿ってきりとったものを頭光の上方へ貼り付けている。

火天は、右斜め下方を見下ろすように向き、三眼四臂で、右側第一手:三角智印、右側第二手:数珠左側第一手:宝瓶、左側第二手:仙杖などを持ち、毛氈座の上への字状に開いた裸足で立つ(写真29)。上半身には、天衣の他に条帛を付け、腰から下の下半身には、裳と腰布を付けている。なお、三角智印、腕錘、臂錘、足錘、条帛の文様など本来金色と考えられる部分は黒色に変化している。髻を結った白い頭髪・鼻髻・頸髻・弛んだ肌から風貌は仙人または老人を思わせる。なお別紙に円相を描き、中に火天の種字を記して、円形の外縁に沿ってきりとったものを頭光の上方へ貼り付けている。

焰摩天は、三眼二臂で左斜め前方を向き、左手に檀摩(人頭杖)、



写真26 十二天像丙本の箱蓋



写真27 伊舍那天像(十二天像丙本)



写真28 帝积天像(十二天像丙本)



写真29 火天像(十二天像丙本)



写真30 焰摩天像(十二天像丙本)



写真31 羅利天像(十二天像丙本)



写真32 水天像(十二天像丙本)



写真33 風天像(十二天像丙本)



写真34 毘沙門天像(十二天像丙本)



写真35 梵天像(十二天像丙本)



写真36 地天像(十二天像丙本)



写真37 日天像(十二天像丙本)



写真38 月天像(十二天像丙本)

右手は屈して手の平を上に出し、毛氈座上にハの字状に裸足の足を開いて立つ(写真30)。上半身には、天衣の他に条帛を付け、腰から下の下半身には、裳と腰布を付けている。頭には鬘を結び、それに瓔珞と宝珠を付けた天冠を被る。檀拏輪の顔も三眼で正面を向き、頭にも鬘を結び宝珠を付けた天冠を被る。なお、檀拏輪主要部、胸釧、臂釧、足釧、条帛の文様など本来金色と考えられる部分は黒色に変化している。なお別紙に円相を描き、中に焰摩天の種字を記して、円形の外縁に沿ってきりとったものを頭光の上方へ貼り付けている。

**小結** まず十二天像丙本は、前述した十二天像乙本の図像と較べてみると尊像の形、足の向き、台座の種類、着衣の形、顔の表情、手足の形、色の配色傾向、図の大きさなど細かい部分まで酷似していることに気づく。そして十二天像丙本の箱書きに、文化9年(1812)五月、この年に願成院第十二世住職となる大勝院第十二世住職の了遍が描いていることが記されている。したがって了遍の手元に府内領主松平近衛が描いた製作年代の古い十二天像乙本があり、乙本を寫したのが十二天像丙本であろう。ただ、天冠や臂釧などは乙本では金泥であるが、丙本は梵天を除き他は黒色である。おそらく高価な金泥が入手できず、金色に似た代替の顔料を用いたものの、経年変化による黒色となったと推定する。金色を呈する真鍮粉(成分銅、亜鉛)は、その成分に含まれる銅が錆びるとくすむような暗い色へ発色をする(註)。このことから真鍮粉を顔料とした可能性が高い。また乙本の焰摩天では垂髪と条帛の色を変えているが、顔料の種類が足りなかったのか丙本では同じ色にしている。

丙本は、十二幅全て火焔頭光もしくはその上方に墨線で円相を描き、そこに丸く切った白紙に種字を書いたものを貼り付けることで共通する。手足の指が尖るような表現や、足首付近から爪先付近における足の浮腫みは丙本全体の特徴である。特に足指の親指と他の指の区別がつかないほどバランスを欠く表現や、色合いのグラデーションなどはなく、技術的なレベルは高くない。

(註)石川徹希氏(元大分県立歴史博物館学芸員)によるご教示

#### 十二天像丁本 十二天像戊本

十二天像丁本と十二天像戊本は、それぞれ風天像(十二天像丁本)と月天像(十二天像戊本)・日天像(十二天像戊本)のみからなる図像である。風天と月天・日天が、単像として拝礼の対象、もしくは修法の本尊となることがまず無い事と、図像的に十二天像で見られる描かれ方があるため、本来は十二天を構成する掛幅仕立ての一幅だったのだろう。そのうえで丁本と戊本は天地や柱など表装の色が異なることと、図像の作行が異なることから別本と理解した。さらに甲本～丙本に欠落もなく、作行も違うので丁本、戊本とした理由であるが、願成院に伝来した経緯は明確ではない。

風天(十二天像丁本)は、一面二臂で、右手は中位で印、左手は輻輪の柄を持ち、左肩に立てかける(写真39)。足には戴手文の飾り付スリットが入った鉤爪付の革ブーツを履いている。体には上半身に外襦衣を着、下半身には裳を付け、その上に肩甲・胸甲・腰甲を装着するなど武装姿である。姿勢は左方向へ右足を踏み出し、顔は右側後方を振り返る状況である。頭部の髪は白髪で、顔の額と頬、足の膝に皺を表すなど老相を示す。眉毛を除く頭髪、鼻鬚、顎鬚、天衣、天冠帯、火焔頭光、輻輪の輻、袖飾りは向かって右から左方向への風で翻り伸びる。また顔や手に陰影を付けていることが注目される。作行は、線描と彩色が繊細にして鮮やかで、優れた仕上がりととなっている。図像的には、上記した甲本の風天や重文指定阿名院本十二天像中の風天に近い。

月天(十二天像戊本)は、一面二臂で、足は裸足で、斜め左方向へハの字状に向き、彩雲上の踏割蓮華座上に立つ(写真40)。しかし顔は左方向を向き、両掌に台の上に山を載せ、更に月輪を載せ、その中の兎を覗き込む。鬘を結った頭髪に天冠をかぶる。足甲付近は、浮腫んでいる。頭の天冠には天冠帯が付き、背後に垂らす。上半身には天衣を両肩に掛け、座の周辺まで垂らす。下半身には腰布付け、裳を穿く。本紙は、地色として背景を濃紺に着色している。火焔の彩色、線描、文様の彩色は繊細ではなく、作行的には手慣れた職業絵師ではない。

日天(十二天像戊本)は、一面二臂で、斜め右方向へハの字状に向き、彩雲上の踏割蓮華座上に裸足で立



写真39 風天像(十二天像丁本)



写真40 月天像(十二天像戊本)



写真41 日天像(十二天像戊本)

つ(写真41)。右手には、不明瞭ながら鳳凰のような三足の鳥が入った赤い日輪を捧げ、左手には開敷蓮華の茎を握る。顔は右斜め方向を向き、右手に載せた日輪内の三足の鳥を覗き込む。鬘を結った頭髮に天冠をかぶる。頭の天冠には白い天冠帯が付き、腰の両脇付近で上方へ翻る。上半身には天衣を両肩に掛け、座の高さまで垂らす。下半身には腰布と裳を身に着ける。本紙は地色として背景を濃紺に着色している。火焰の彩色、線描、文様の彩色は繊細ではなく、作行的には手慣れた絵師ではない。

#### 十二天像屏風 六曲一双右隻(写真42)

第一扇 焰摩天は、菩薩顔で、左斜めを向き、左手に檀拏杖(人頭幢)、右手は屈して掌を前に出し、白蓮華(右)と紅蓮華(左)と色の違う踏割蓮華座の上に立つ(写真43)。焰摩天は三眼で斜め左方向をみるが、檀拏杖の人頭は二眼で正面を向く。焰摩天とその人頭の天冠帯は上方へS字形に翻る。肉身は薄柿色で上半身には天衣を両肩に掛け、蓮華座の高さまで垂らすほか、やや灰色をした淡鼠色の条帯をつける。下半身には腰布と裳を身に着ける。天衣は暗い緑系の色をした天鶯絨色で、腰布も同じ色である。裳は深い赤系色の雀茶色で描かれ、その上に戴金で麻の葉紋様を表現している。また裳の縁周りは青褐色で、戴金による唐草文が描かれる。天冠、檀拏杖、装身具は鈍い橙系の黄椽色の顔料で、金泥による彩色で描かれる。

第二扇 火天は、一面四臂で、斜め右方向へハの字状に向き、右斜め前方向を虎視する面相で、毛氈座の上に裸足で立っている(写真44)。腕は四臂で、左手第一手に水瓶を下方に下げ、同第二手に竹製の仙杖、右手第一手に三角印、同第二手に白い数珠を掲げ持つ。なお、三角印に祀は描かれていない。頭部の後ろに頭光があり、その後ろから足下向うに火天を象徴する火焰光背がある。髪、眉毛、髭などは白く、また瘦身の手足と体部は薄柿色の皮膚で皺があるなど、老相を表現する。上半身には天衣を両肩に掛け、座の高さまで垂らすほか、鈍い黄系の色をした抹茶色の条帯をつける。上半身には暗い緑系の色をした天鶯絨色の天衣を付けている。下半身には天衣と同じ色をした腰布、やや灰色い紫系の薄色をした裳を身に着ける。裳の下には表が灰色の青紫系の青



写真42 十二天屏風 六曲一双右隻

藤色をした袴が覗き、白い内側が推れている。火焔光は、薄い赤系の色を塗り、その後薄い墨線とやや濃いめの赤系色で火焔を表現している。火焔冠、装身具、水瓶は金泥かもしれない鈍い橙系の黄椽色の顔料で彩色される。

第三扇 帝釈天は、三眼一面二臂で、荷葉座の上に正面を向き香を履いて立つ。右手に独結杵、左手に八花鏡を掲げる(写真45)。尊顔は、峻厳な顔立ちをし、頭に瓔珞を垂下させた角冠(宝冠)を被る。肩に垂髪を垂らし、上半身から下半身にかけて外襦衣、袍と裳(裳)を身につける。口周辺に髭状の表現がある。天衣の色は、焰摩天や火天の場合と同様な天鷲絨色である。外襦衣の袖は、鈍い赤系の今様色で、上に裁金による雷文が描かれ、袖口周辺は深い青紫系の紺色で彩色される。裳は、白い部分と下の深い青紫系の紺色で彩色される。裳の白い部分は、金泥と思われる鈍い橙系の黄椽色の顔料で雲のような文様が描かれる。この顔料は角冠(宝冠)、独結杵、八花鏡、装身具についても同様である。

第四扇 伊舎那天も三眼二臂で、右斜め前方向を見る姿勢で毛氈座の上に草履を履いて立つ(写真46)。左手には血を入れた劫波杯、右手に虎皮の飾が付いた短い三叉戟を持ち、首には頭蓋骨を付けた瓔珞を付ける。肉身は鮮やかな青緑系の鉄色で、上半身は裸である。その上に表が深い青紫系の紺色で、裏が柔らかい赤系の東雲色と白地の天衣をつけ、下半身には暗い緑系の天鷲絨色の腰布と白い裳を身につけ、さらに裳の下に袴を付けているようだ。白い裳の表面には、麻の葉という伝統文様が裁金で表現している。天冠(宝冠)、三叉戟端部、瓔珞、天冠帯飾、劫波杯、草履、荷葉座文様、跨の裾文様などは黄椽色で金泥であろう。更に伊舎那天の特徴をいえば、目頭、目尻を赤く着色すること、上顎の歯が下顎の下唇下部を噛む表現をしている。

第五扇 日天は、一面二臂で、右斜め前方向を見る姿勢で、いずれも反花とみられる白蓮華(右)と紅蓮華(左)と色の違う踏割蓮華座の上に裸足で立つ(写真47)。左手に開敷白蓮華、右手は赤い日輪が載った開敷白蓮華の茎を掴む。上半身は裸で、天衣と条帛をまとい、下半身に腰布と裳をつける。このうち天衣の表側、腰布、踏割蓮華座の蓮肉の色は、暗い緑系の色をした天鷲絨色である。条帛は、裁金による雷文が描かれる。裳は、円文・花文などが裁金により描かれる。条帛は、なお赤い日輪の中には太陽神を象徴する黒い三足鳥(八咫鳥)がみえる。頭に天冠をつけるほか、体に腕釧、臂釧、足釧など黄椽色で、金泥で彩色した装身具をつける。



写真43 娑摩天像(十二天屏風右隻)



写真44 火天像(十二天屏風右隻)



写真45 帝釈天像(十二天屏風右隻)



写真46 伊舍那天像(十二天屏風右隻)



写真47 日天(十二天屏風右隻)



写真48 梵天像(十二天屏風右隻)

天衣:暗い緑系の色をした天鷲絨色。条帛:あざやかな橙系の代赭色。戴金による雷文。腰布:天鷲絨色(上部)・橙系の代赭色/やや灰色い赤紫系の桜鼠色/青褐色(下部)、裳:やや灰色い赤紫系の桜鼠色・緑周りは青褐色。戴金による円文・針葉文。蓮肉:肉身:明るい灰みの橙系の肉色

第六扇 梵天は、四面(各面三眼)四臂で、正面(主面)と足が極わずかに左斜め前方向を向く姿勢で、荷葉座の上に裸足で立つ(写真48)。右手第一手に白い開敷蓮華、同第二手は印、左手第一手は水瓶、同第二手は三叉戟をもつ。頭部に天冠を付け、そこから細長い天冠帯が腰付近にまで翻りながら伸びる。上半身には天衣と条帛を付け、下半身に上下の腰布と裳をつける。下段の腰布には、戴金による針葉文がある。裳の彩色は、青褐色の円文が描かれたあと、ピンク系の薄柿色で塗りつぶすように彩色する。天冠や瓔珞などの装身具、三叉戟、水瓶は、黄褐色で、金泥かもしれない色で彩色する。

天衣:暗い緑系の色をした天鷲絨色。条帛:白、その上に金泥による文様。腰布:天鷲絨色(上部)・橙系の代赭色/やや灰色い赤紫系の桜鼠色/青褐色(下部)、裳:ピンク系の薄柿色

#### 十二天像屏風 左隻(写真49)

第一扇 地天は、一面二臂で、わずかに左斜め前方向の左上の寶杯に入る華を見る姿勢で、雲座上の踏割蓮華座の上に裸足で立つ(写真50)。踏割蓮華座は右が赤で、左は白の反花の蓮華座で、ここに正面に向け足を開くように乗せる。顔は忿怒相ではなく温和な菩薩相で、髪は髻を結び、天冠を被る。天冠からは飾りの付いた細く短い天冠帯が両肩上でS字形に翻る。右手は、親指と人差し指を伸ばし、中指・薬指・小指を内側に軽く曲げ印を示す。肉身はほぼ白く、体部には天衣と条帛、下半身に腰布と裳をつける。

条帛:やや灰色い赤紫系の桜鼠色、腰布:天鷲絨色(上部)/やや灰色い赤紫系の桜鼠色、裳:あざやかな橙系の代赭色・暗い灰みの青紫系の青褐色

第二扇 月天は、左真横を向き、台上の上に山を置き、さらに上に月輪を置いた台を両手で捧げ、雲座上の白(左)と赤(右)の踏割蓮華座の上に裸足で立ちつつ月輪内を覗きみる(写真51)。顔は左真横を向くが、足は踵と足指先の方向は左斜め後の方向を向く(13時の方向)。二眼二臂の像で、額に白い白毫がある。月輪内の三日月上には白い兎がいる。顔は忿怒相ではなく温和な菩薩顔で、髪は髻を結び、そこに天冠を被る。口の周辺に髭状の表現がある。天冠からは細長い天冠帯を臀部の後ろまで垂らす。上半身には天衣と条帛、下半身に腰布と裳をつける。

天衣:暗い緑系の色をした天鷲絨色(表)・強い赤系の肉桂色と白のグラデーション(裏)。条帛:やや灰色い緑系の薄青色とやや灰色い青系の灰青色のグラデーション。腰布:あざやかな青紫系の濃藍色を地色とし、上に戴金による菱形文(上部)・あざやかな橙系の代赭色を地色とし上に雷文の戴金、緑周りは青褐色(下部)、裳:灰みの黄系の油色・緑周りは暗い赤系の茶褐色で上に戴金による針葉文、天冠・瓔珞・手に持つ台は金泥で表現している。

第三扇 毘沙門天は、左斜め前方を向き、右手に宝棒、左手に捧げもつた宝塔を虎視する(写真52)。頭に天冠と一体化したような兜、体には袍と裳を身に着け、袍の上に肩甲・胸甲・腰甲、下半身には裳の上に腰甲・前橋・脛当を装着するなどの武装姿で毛氈座上に草履を履いて立つ。草履を履いた足は、正面方向に向けて開く姿勢をとる。

肉身:明るい灰みの橙系肌色、天衣:暗い緑系の色をした天鷲絨色(表)・白(裏側)、戴金による針葉文、兜・装身具・肩甲・胸甲・腰甲・宝塔・宝棒で特に著しく金泥で彩色。毘沙門天の着色は、8色程度の色彩である。

第四扇 風天は、通例浅黒い肌をした老人の姿で描かれており、左隻第四扇の風天も同様である(写真53)。本例は、体軀は右斜め前方を向き歩もうとする姿勢ながら、顔は左斜め前方を振り向き毛氈座上に草履を履いて立つ。左手は剣印、右手は風輪・風幢の付いた幡杖を持つ。髪は部分的に髻を結び、頭に被る幅狭い天冠には翼状の飾りと、正面にも飾りが付く。上半身には、袍の上に肩甲・胸甲・腰甲、下半身には裳の上に腰甲・前橋・脛当を装着している。

肉身:暗い灰みの橙系の黄枯茶色、天衣:暗い緑系の色をした天鷲絨色(表)・とても暗い青紫系の鉛色と白





写真19 十二天屏風 六曲一双左隻

のグラデーション(裏側)。首布:暗い緑色の緑青色。袍の袖:ピンク系の薄桃色。天冠・装身具・幢幡・肩甲・胸甲・腰甲・脛当・宝塔・宝棒は金泥で彩色。風天の着色は、9色程度の色彩である。

第五扇 水天は、一面二臂で、左斜め前方を向き、左手に角のない龍索、右手に宝剣を掴み、海上で波しぶきがゆかる亀座の上に裸足で立つ(写真54)。上半身に条帛、下半身に腰布と裳、上半身から下半身にかけて天衣を曲線状に絡ませる。通例頭部には五龍冠をつけるが、七龍冠である。七龍冠からは、白く細長い天冠帯を耳付近から前後に垂らす。からだが薄い緑色が特徴。十二天屏風を構成する十二天の中では、火天と水天を除き、頭光の緑部をとびとびに火焰が小さく燃えている。ところが水天の頭光においては、緑部から外方に向け先細りの黒い墨線が二本単位で引かれ、その間を濃い黒色で外側に向けグラデーション状に充填し、その外側はやや薄い黒色で同様にグラデーション状に充填している。水天であることから水煙を表現しているのかもしれない。

第六扇 羅刹天は、一面二臂で、顔が右斜め前方を向き、左手は剣印、右手は宝剣を持ち、毛氈座に裸足で立つ(写真55)。両脚は正面に向け開くが、右足の指先は上に反り上げている。頭に雲形飾りの付いた輪状の天冠をはめるが、天冠の雲形飾りに接する部分にだけ小さな髷を結び、その他は全て焰髪である。上半身から下半身にかけて、袍、裳、袴、その上に肩甲・胸甲・腰甲・表甲、前褌を装着している。ただし脛当は、袴の内側に着けている。また表甲と裳の間から虎皮が下る。天冠帯は両肩上方へS字形に翻る。

その他 以上十二天屏風六曲一双を報告したが、屏風全体のことについて記載しておく(写真12・49)。基本構造は6枚の襖を蝶番でつないだものである。片側の画の各扇に一軀ずつ十二天を描いた本紙を貼り付け、その周囲に金箔を貼り付けている。さらに本紙の下側に茶、赤、黄、青などの色彩で瑞雲が描かれるなど、屏風を荘厳している。

小結 この六曲一双の十二天屏風は、顯成院住職に伝わる寺伝によると「土佐光起」の作になるとい(註1)。土佐光起と言えば、江戸時代の古いころ(17世紀代)に活躍した土佐派を代表する人物であるが、彼が描いた十二天像の類例を知らないことと、落款がないことから断定できない。

十二天像屏風の右隻と左隻は、暗い黒灰色の紙本を下地に、彩色をしながら十二天を描いている。全ての十二天は、頭光の内圏が薄緑、外圏が金泥の頭光を有する。頭光は、緑部が水煙状に薄く立ち上る場合(水天)、頭



写真50 地天像(十二天屏風右隻)



写真51 月天像(十二天屏風右隻)



写真52 毘沙門天像(十二天屏風右隻)



写真53 風天(十二天屏風右隻)



写真54 水天像(十二天屏風右隻)



写真55 羅刹天像(十二天屏風右隻)

光の背後に足元から燃え立つ場合(火天)を除き、全て部分的に小さな火焔の表現がある。また十二天を構成する全ての天の頭光・火焔光などの上には、薄緑色の小蓮台上に白く塗りつぶした円相を載せている。

十二天像屏風右隻・左隻の、それぞれ第一扇から第六扇の各面に共通するのは、屏風の下部に白雲、紫雲、青雲などで埋め尽くし、その尊像他を描いた本紙を貼りつけている。そして本紙の周囲に金箔を貼り付けた豪華な仕上げとなっている。

大正十年十一月現在の願成院の状況を首藤智傳(当時の願成院・観音寺住職)が『願成院之部』と題する手書きの概要書をまとめており、それによると仏画之部「16 十二天ヒョウブ」とあるのが十二天像屏風のことである。また同書の器具之部「灌頂道具 一切」とあるほか、伝法灌頂に関する灌頂の次第を記した記録がある。このようなことから十二天像屏風は、灌頂などの重要な儀式を執り行う際に道場内にあつてそれを囲み護るためのものであり、願成院でそうした重要な儀式が行われていたことを示している。

註1 2022年(令和4)月22日現在、願成院住職兼観音寺住職である後藤幸雄師からの御教示。また師によると、「屏風の背面に破れた部分があり、大勝院から願成院宛書簡が下張りとしてある。」というが、詳細は未確認。

### 十二天像版画(写真56～写真67)

六角堂能満院粉本の十二天像(聚成番号2261～2272)の図像は、六角堂能満院の憲海等がおそろ長谷川等舟が所蔵の粉本図像を墨書きで写しとったまくり状態の粉本である。この粉本を基に六角堂能満院に集った憲海らにより版木が彫られ、版本(版画による図像)が刷られている。六角堂能満院の版本そのものは、京都における幕末期の動乱で焼け、粉本だけが運び出され残っているという(京都市立芸術大学芸術資料館編2004)。

そこで願成院本十二天像版画についてであるが、長さ121.5cm前後×幅41.7前後に切った画仙紙(12枚)に十二天の各尊像を刷った版画である。その特徴を願成院本十二天像甲本と比べると多くの部分で共通する。しかし、雲座の渦巻表現、火焔頭光の火焔表現、天衣の翻りと線の本数、荷葉座の葉脈本数、持物の位置と傾きなどを六角堂能満院粉本の十二天像(聚成番号2261～2272)と願成院本十二天像版画とで比べると両本は細部に至るまで全く一致している。このことから、むしろ六角堂能満院粉本の十二天像(聚成番号2261～2272)を基に彫られた版本から刷られたのが願成院本の十二天像版画である。十二天像版画の像様についてみると、頭に鬘を結び、顎髭は下に垂れ下がり、錚持の注口部に欠く、などの特徴を持つ火天や各尊像の火焔表現を除けば概ね十二天像甲本と同じである。そのため個別の説明については省略し像様一覧表にまとめているので参照されたい。

なお十二天像版画のように、六角堂能満院による版画は他に、宝珠曼荼羅図、弘法大師像戊本、戊本十三仏来迎図、不動明王像 戊本、丙本不動明王像 己本など5幅あり、この中には「六角堂・」の文字が刷られたものも含まれる。これらについては次回以降に報告する。

私は、六角堂能満院の憲海等がこうした版本を作成し配布したこと以上のことは知らない。しかし、今回の願成院本で明らかになったのは、末彩色の版本の分布が京都から遠い九州にまで達する販路であったことである。その際、末彩色し表装した掛幅仕立てのものも注文に応じ製作し販路に乗せたかどうかははっきりしない。これに関連し、注目される掛幅として、願成院本の「勝敵毘沙門天像」がある(綿貫2019.2)。小さな宝珠で満たされた紺色の虚空から雲に乗って降りてくる勝敵毘沙門天の一行を描いた図像である。これと細部に至るまで同じ図像が六角堂能満院粉本(聚成番号2201)である。これは六角堂能満院の本粉と願成院勝敵毘沙門天像が深い関係のあったことをしめし、今後追求していく必要がある。



写真56 伊舍那天像(十二天像版本)



写真57 帝釈天像(十二天像版本)



写真58 火天像(十二天像版本)



写真59 焰摩天像(十二天像版本)



写真60 羅利天像(十二天像版本)



写真61 水天像(十二天像版本)



写真62 風天像(十二天像版本)



写真63 毘沙門天像(十二天像版本)



写真64 梵天像(十二天像版本)



写真65 地天像(十二天像版本)



写真66 日天像(十二天像版本)



写真67 月天像(十二天像版本)



1 愛宕権現曼荼羅図(部分) A



2 不動明王像甲本(部分) B



3 不動明王像甲本(部分) C



4 愛宕権現曼荼羅図(部分) D1



5 不動明王像甲本(部分) E  
写真68 長谷川等叔の特徴

## 2 十二天像の特徴

現在、竹田市にある願成院及び観音寺の住職である後藤幸雄師が管理する仏画群のなかに十二天像は計6種類あり、これまで概要を解説してきたところである。それらは、願成院、大勝院、観音寺に伝来していたものである。このうち甲本・乙本・丙本はそれぞれ彩色された十二幅の掛幅で構成されるが、丁本と戊本は彩色画ながら半幅と二幅でしか残っていない。また版本は、まくり状態で、版本から版面として刷られた白黒の十二天像である。屏風は、右隻と左隻からなる六曲一双の屏風仕立ての十二天像である。ここではこれらの十二天像が有する大まかな特徴をまとめておく。

### (1) 十二天像甲本の作者

まず願成院が古くより装備していた十二天像甲本であるが、箱書や表装裏の墨書に作者名が記されていない。しかし私は、甲本の作者として京都長谷川派の長谷川賀一郎等叔と推定している。一目見たときの作風と、絵の完成度の高さから仏画絵師としての長谷川賀一郎等叔を推定したのである。願成院が所蔵する仏画で、賀一郎もしくは等叔の名前が出てくる仏画は七幅ある(不動明王像甲本:寛政4年・1792、弘法大師絵伝対幅:文政12年正月・1829、兜率天曼荼羅図乙本:文政12年10月・1829、高野四社明神像:天保5年3月・1834、愛宕権現曼荼羅図:天保5年3月・1834、弘法大師庚本:天保5年・1834)。これらから等叔の特徴を列記しよう。

A:赤・紺・緑それぞれに薄い色線のようにし、それら有色間に幅広の白を境界として挟み、これを繰り返して展開する表現(写真68-1)。このような表現については、兜率天曼荼羅図乙本にみられる建物屋根瓦や装飾、それに蓮華座や龍船に見られる。この表現については、他の仏画絵師も採用している可能性はあるが、170幅を超える願成院の彩色仏画のうちで、上記の長谷川等叔の作例と無名ながら長谷川等叔の可能性が高い例、もしくは長谷川派と推定される例を除けば少ない。

愛宕権現曼荼羅図甲本では馬飾りと勝軍地藏と毘沙門天の兜飾りに見られる(綿貫 2019.2)。高野四社明神像では、上段で向かって右側に坐す丹生明神の帟帯と見られる部分の幡状飾りで用いられる。また願成院本弘法大師絵伝(対幅)のうち一幅目の下から6段目で右から4コマ目の「石碑建立」、もしくは「惠果入滅」に該当する場面で、惠果阿闍梨の亡骸の前で悲しむ官人かと思われる人物の帽子の彩色に見られる(綿貫 2021:13)。

B:帯状の赤や青などによる彩色をまず描き、同じ色味を段階

的に薄い色調にしながら帯状に並行するように描いた表現(写真68-2)。

このような表現については、不動明王甲本では裳の裾部(緑部)にピンク・赤系の色から段階的に薄くしている部分がある。兜半天曼荼羅図乙本では、上方の虚空に花が舞っている。この花卉を赤・薄赤・白や濃紺・薄青・白と色を描き分けている(綿貫 2021:8)。愛宕権現曼荼羅図では、毘沙門天が身に着けた腰甲の外側に毘沙門亀甲文と接するが、その外側に濃い緑、薄緑、白と並行するように描き分けている。なお毘沙門亀甲文自体も長谷川賀一郎等叔が好んで採用する和文様である。

C:表現が曲線的な火焰の中程から、それ以降の鋭い先端にかけて直線的に近い輪郭でのグラデーションとなる(写真68-3)。

このような表現については、願成院本不動明王像甲本の不動明王(写真68-3)、願成院本愛宕権現曼荼羅図甲本の不動明王像(綿貫 2019.12:7)で見られる。

D:武装した像において、肩甲、胸甲、腰甲などに毘沙門亀甲という紋様を多用する傾向がある。この場合、大抵は黒い輪郭に金色で充填したかのような紋様が多いが(D1)(写真68-4)、輪郭線の内側に金以外の色で彩色した場合もある(D2)。

このような表現には、願成院本弘法大師絵伝(対幅)のうち一幅目の「修門護法」の場面で、飛雲上の武人二人の肩甲に毘沙門亀甲が見られる(綿貫 2021.1:13)。また願成院本愛宕権現曼荼羅図甲本にみられる勝軍地藏の肩甲と毘沙門天の腰甲でも毘沙門亀甲が見られる(綿貫 2019.12:7)。

E:条帛や裳などに描かれた単純な松笠文の場合が多い(写真68-5)。

このような表現については、願成院本不動明王像甲本の条帛や裳に描かれている。

以上、A～Eまで長谷川賀一郎等叔作であることが分かっている仏画からその特徴と見られるものを抽出した(写真68)。いずれも他の絵師の掛幅ではあまりお目にかかれない特徴である。この特徴をもとに、十二天像甲本の特徴をみてみよう。

まず十二天像甲本以外では、十二天像屏風の帝釈天にB-E、同図の伊舎那天にE、同図の風天と日天にB、同図の毘沙門天がA-B、同図の羅刹天がD1などとなっている。また勝敵毘沙門天については、A-Bの他、D1の要素が見られた(綿貫 2019.12:7)。願成院が所蔵する仏画の尊像で、長谷川賀一郎等叔銘の残る仏画を除けば少なくともAからEまでの特徴を有するものは以上挙げたものが全てである。そしてそれ以外の仏画にはあまりみられない。

そこで十二天像甲本であるが(第1表・写真69)、まずCの火焰にみられる筆線とグラデーションの特徴は、十二幅すべてにおいて曲線から直線的な火焰の表現が技術的に同質であり、同一人物による作品である。そのうえで十二天像甲本は、AからEまでの特徴を有するものの有無を観察するとそれが多用されていることが窺える。とりわけE松笠文は甲本全ての尊像に描かれる他、AとBも多い。こうした技法的な特徴を十二天像甲本が有することから、同本が長谷川賀一郎等叔の作例である可能性が高まる。

さらに言えば、十二天像甲本の像様に酷似しているのが、六角堂能満院粉本の十二天像(聚成番号 2261～2272)である(京都市立芸術大学芸術資料館 2004:P288～291)。この十二天像は、先行する図は不明ながら、六角堂能満院の憲海(大願)が写したものであり、それが入っていた十二天袋の墨書によると「嘉永二己酉二月十三日袋新調」と書いている(京都市立芸術大学芸術資料館 2004:P330)。この嘉永2年(1849)というのは、六角堂能満院の憲海・憲里・現光が集中的に長谷川家(当時の当主は長谷川等舟)の所蔵する粉本を集中的に写した年であり、とりわけ同年1月8日から2月12日まで5日と間を開けずに写しを完成させている。そして2月12日の翌13日に六角堂能満院粉本の聚成番号(聚成番号 2261～2272)の十二天像が完成していることからすれば(松尾 2015:263・264)、それは1日ではできず、当然他の長谷川家保有の粉本とともに1月から写しを始めていた可能性は高い。したがって六角堂能満院粉本の聚成番号(聚成番号 2261～

2272)も長谷川家に伝来した粉本を基に作成した可能性が高いとすると、それに酷似した願成院本十二天像甲本の作行などを勘案すると、長谷川賀一郎等叔の作例であると推定する。

(1)十二天像甲本以外の十二天像の作者と来歴

十二天像乙本・丙本は、一見してその作行から職業的絵師の手になるものでないことがわかる。両本とも上記したように作者はわかっており、乙本は豊後国府内領主：松平長門守近衛が「寛政5年(1793)9月」頃描き、丙本は「文化9年(1812)5月」に大勝院十二世住職の了遍が描いたことを両本とも箱書きしている(写真13.26)。さらに乙本の箱書きには「御寄附松平長門守近衛御代」とあり、願成院に描いて間もなく寄付されたのだろう。

第1表 十二天像甲本に見る長谷川賀一郎等叔の要素の位置

十二天	A	B 並行段階色	C 火焰色	毘沙門亀甲		E 松笠文
				D1 金	D2 他色	
伊舎那天	なし	なし	火焰頭光	なし	なし	天衣・幡
帝釈天	なし	環珞飾	火焰頭光	なし	腰布	長袂衣・条帛
火天	なし	なし	火焰頭光	なし	なし	裳
輪摩天	天冠飾	なし	火焰頭光	なし	なし	条帛
羅刹天	なし	前褌・縷袖	火焰頭光	胸甲	裳	外褌衣
水天	なし	なし	火焰頭光	なし	裳	条帛・跨
風天	なし	天冠飾・胸甲・腰甲	火焰頭光?	腰甲	なし	条帛
毘沙門天	腰甲縷袖	兜・前褌・腰甲・經当	火焰頭光	なし	なし	裳
梵天	天冠飾	天冠飾	火焰頭光	なし	なし	腰布・跨?
地天	天冠飾	天冠飾	火焰頭光	なし	なし	天衣・腰布
日天	なし	天冠飾	火焰頭光	なし	腰布	天衣・裳
月天	天冠飾	天冠飾	火焰頭光	なし	なし	条帛



1 毘沙門天(十二天甲本) A



2 毘沙門天(十二天甲本) B



3 梵天(十二天甲本) A・B



4 風天(十二天甲本) D1



5 輪摩天(十二天甲本) E



6 日天(十二天甲本) D2

写真69 十二天像甲本に見る長谷川賀一郎等叔の要素の部分



松平長門守近衛は、明和7年(1770年)7月21日に第5代領主の家督を継承しているが、その治世のなかで天明6年(1786)から天明7年(1787)、享和元年(1801)の虫害による大凶作を始め、災害や大火が相次ぎ、財政は逼迫するなど、多難な時期を統治した領主であった。そのためか、今日大分市金剛宝戒寺が所蔵する中世の「仏涅槃図」を修復させたほか、現在願成院が所蔵する如意輪観音像、五字文殊菩薩像を描くなど、政務の傍ら仏画製作に精進するなど意外にも神仏に篤い信仰心を見せている。そのような経緯の中で参考とした十二天像は不明ながら描いたのが十二天像乙本ということになる。

次に十二天像丙本であるが、これは箱蓋の表に「掛物箱 大勝院」裏に「文化九年五月 了遍造之」という墨書が書かれており、大勝院の第12世住職を務めた了遍が描いたことが分かっている。了遍がこの丙本を描いた文化9年(1812)は、彼が大勝院の住職から願成院の住職へ栄転した年である。了遍が願成院に異動する直前に描いたことになる。

以上の十二天像乙本と丙本は、職業絵師が描いたものでないだけに、作作的には上手と言える段階のものではない。この両本は、十二天像各尊像の大きさ、輪郭・文様・天衣の翻り、などが全く瓜二つである。その為、作画年代の古い十二天像乙本が願成院に寄付されていたことを知っていた大勝院住職の了遍が乙本から下絵を写し取り、彩色・表具したと考えられる。彩色については前述したように、良質な顔料が入手できる立場にあった松平長門守近衛とそうではなかった了遍の違いがでている。とりわけ後者については金泥で表現すべきところを代替の顔料を用いたのか、経年劣化のためか黒く変色している(写真27~38)。

さて大正時代に願成院と観音寺の住職を勤めていた首藤智傳が書いた『大正拾年拾一月現在 願成院之部 住職 首藤智傳』と『大正拾年拾一月現在 観音寺之部 住職 首藤智傳』(竹田市歴史資料館寄託史料)がある。これは願成院と観音寺それぞれの壇・信徒・境外仏堂・祈禱料・守料・雑取入・彫刻仏・仏画・器具・古文書・在住者・建築物・土地の内容を記した手控えのようなものである。このうち『願成院之部』をみると、「9.十二天 紙表装 十二幅」及び「16.十二天ビョウブ 紙表装 六枚續二箇」が記されている。前者は残りの良い十二天像甲本と、十二天像屏風に該当するのだろう。一方、『観音寺之部』では「2.十二天尊 紙表装」とあり、十二天像を観音寺が所蔵していることを記しているが箱書きや、表装裏に墨書はなく、詳らかではない。これを読み解くうえで重要な史料に首藤智傳の筆跡で記された『願成院 観音寺什物控簿 保存会』(竹田市歴史資料館寄託史料)があり、これには計113幅の仏画の名称が記録されている。この資料には江戸時代から願成院・観音寺で所蔵されてきた仏画に加え、仏画の墨書や収納箱の箱書きからかつて明治2年(1869)に廃寺になった大勝院、やはり同じころ廃寺となった東洞寺(現在の妙見寺で、豊後竹田駅裏にある寺)や竹田高校付近にあった泉福寺のなどの名前が記された仏画が含まれている。このことから1869年前後に廃寺となった寺の従物を願成院や観音寺が継承したことを示している。願成院は、明治2年(1869)の時点でまだ大勝院に移転する前で、岡城北方の愛宕山で移転の準備をしていた頃である。そうすると観音寺裏の石垣を隔てて極隣接する観音寺が、大勝院の廃寺に際して什物を継承したことが読み取れる。その上で『観音寺之部』に記された十二天像として最も蓋然性が強いのは大勝院の了遍が描いた十二天像丙本しかないことになる。

#### (1) 十二天像の特徴

願成院が所蔵する江戸時代の十二天像は計七種類ある。この中で、作ぶりや作行からして職業絵師の手になると推定されるのが十二天像甲本・十二天像戊本(風天)・十二天像版本・十二天像屏風である。需要の多い京都・奈良近辺で職業絵師は、著名な仏画をみる機会や職業柄仏画を描く機会も多い。そこで最も完成度の高い十二天像甲本と同じか、異なるかで比べて見た。各本の属性を比べて見る部分は、天ごとの顔の向き、足の向き、足の状況、座の種類など、計48項目で、表2に集約した。このうち顔の向きで、斜め右上、斜め右下、斜め右、同じ右ということであった。

十二天像甲本を元に比べると、すべての項目(48項目)で一致するのが版本で、次に屏風が43の項目で一致するので、おそらく系統的には近い関係にあるのだろう。違いを強いて挙げれば、火天では、頭髮が角刈風(甲本)か鬘に鬘帯を付けた部分(版本)という違いと、数珠を右手第二手が下位(甲本)か中位(版本)に持つという違いである。また地天が持つ花を入れた鉢が甲本では透かしのある入れ物であるのに対し、版本では透かしのない鉢である違いだけである。一方、屏風が甲本と違う部分は、風天の3項目(顔の向き:斜め左上、足の向き:右斜八字形、足の状況:草履)、梵天の1項目(顔の向き:正面)、日天の1項目(足の向き:正面ハの字形)である。おそらく屏風の作画をする際に参考とした十二天像及びさらに先行する十二天像に修理などの経緯を反映しているのかもしれない。いずれにしても、甲本、版本、屏風は近縁な十二天像といえよう。

十二天像甲本については上記したように看過できない特徴がある。肉身体部の凹部・顔・足などに陰影がつけられ、立体感を表現している点である(写真72)。この表現は、西洋画の特徴であるが、甲本を描いたと考えられる長谷川賀一郎等叔はその技法を取り入れていたことを示している。

ところで上述したように六角堂能満院能満院の憲海等が作成した聚成番号(聚成番号 2261~2272)の十二天像粉本は、長谷川家所蔵の粉本から写したものと考えたいが、この六角堂能満院の粉本を基に制作された版本から刷られたのが順成院本十二天像版本である。版本は線の一本一本、紋様の形と配置など、全



写真70 日天像における十二天像乙本と丙本の比較(左:乙本、右:丙本)



写真71 毘沙門天(十二天甲本)Aと毘沙門天(十二天丙本)Bの比較

ての部分で六角堂能満院能満院の憲海等が嘉永2年(1849)2月頃作成した聚成番号(聚成番号 2261～2272)と同様である。したがって六角堂能満院能満院の憲海等が聚成番号(聚成番号 2261～2272)の十二天像を基に開版したのは嘉永2年(1849)2月から間もない頃と思われ、ここに願成院本十二天像版本を刷った上限時期が想定される。

第2表 願成院十二天像の属性

	属性	帝釈天	火天	焰摩天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
甲本	顔の向き	正面	斜め右上	斜め左	斜め右	斜め左	斜め右上	斜め左	斜め右	斜め右	斜め左	斜め右	左
	足の向き	正面ハ字形	右斜八字形	斜めハ字形	変形正面八字	正面ハ字形	左八字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	右斜八字形	左斜八字形
	足の状況	否	探足	探足	探足	探足	草履	草履	探足	探足	探足	探足	探足
	座	毛氈座	毛氈座	網刺草履座	毛氈座	亀座	毛氈座	毛氈座	毛氈座	荷葉座	踏刺/雲座	踏刺/雲座	踏刺/雲座
乙本	属性	帝釈天	火天	焰摩天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
	顔の向き	斜め右下	斜め右下	斜め右	斜め左	正面	斜め右下	斜め左	斜め右	斜め右	斜め左	斜め右	斜め左
	足の向き	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	右斜八字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	左ハ字形	左ハ字形	正面ハ字形
	足の状況	否	探足	探足	探足	探足	毛皮ブーツ	毛皮ブーツ	探足	探足	探足	探足	探足
丙本	属性	帝釈天	火天	焰摩天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
	顔の向き	斜め右下	斜め右	斜め右	斜め左	正面	斜め右下	斜め左	斜め右	斜め右	斜め左	斜め右	斜め左
	足の向き	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	右斜八字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	左ハ字形	左ハ字形	正面ハ字形
	足の状況	否	探足	探足	探足	探足	毛皮ブーツ	毛皮のブーツ	探足	探足	探足	探足	探足
丁本	属性	帝釈天	火天	焰摩天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
	顔の向き						斜め右上						
	足の向き						左八字形						
	足の状況						毛皮のブーツ						
戊本	属性	帝釈天	火天	焰摩天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
	顔の向き											斜め右	左
	足の向き											右斜八字形	左斜八字形
	足の状況											探足	探足
版本	属性	帝釈天	火天	焰摩天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
	顔の向き	正面	斜め右下	斜め左	斜め右	斜め左	斜め右上	斜め左	斜め右	斜め右	斜め左	斜め右	左
	足の向き	正面ハ字形	右斜八字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	左八字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	右斜八字形	左斜八字形
	足の状況	否	探足	探足	探足	探足	探足	毛皮ブーツ	草履	草履	探足	探足	探足
扉地	属性	帝釈天	火天	焰摩天	羅刹天	水天	風天	毘沙門	伊舎那	梵天	地天	日天	月天
	顔の向き	正面	斜め右	斜め左	斜め右	斜め左	斜め左上	斜め左	斜め右	正面	斜め左	斜め右	左
	足の向き	正面ハ字形	右斜八字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	右斜八字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	正面ハ字形	右斜八字形	左斜八字形
	足の状況	否	探足	探足	探足	探足	草履	草履	草履	探足	探足	探足	探足

※ この色の塗りつぶしは、黄色く塗りつぶした甲本と一致する部分



1 日天



2 帝釈天



3 月天



4 梵天



5 地天



6 毘沙門天



7 羅刹天



8 火天



9 風天

写真72 十二天像甲本の陰影表現と表情

十二天像丙本は、上述したように乙本からから写し取ったものであるため、彩色を除き基本的に一致している。しかし乙・丙本は、それぞれ31の項目で甲本と同一傾向を示すに過ぎず、違いが大きい。とりわけ毛氈座は、甲本が12幅中5幅に過ぎないのが乙・丙本では12幅全て毛氈座を採用している。このような乙本・丙本の特徴からすると、最初に乙本を描いた松平長門守近衛は甲本・丁本・戊本・版本・屏風と全く違った図像の系統から写したといえる。

#### まとめ

今回、願成院が一括管理する大量の十二天像を報告してきた。その中で明らかになったのは、江戸時代から願成院所蔵となっていた甲本・乙本・屏風、明治2年に庵寺となってから願成院に移管された丙本、不明の丁本・戊本・版本からなっていた。その他の丁本・戊本・版本も灌頂等の重要な儀式を執り行っていた願成院が所蔵していた可能性は高い。ここでは、願成院に残る十二天像の重要な点を列記し、まとめとする。

- ① 十二天像の甲本・丁本・丁本・版本・屏風は、作行から職業絵師によるものである。
- ② そのうち甲本は、作行から京都長谷川派第12世長谷川賀一郎等叔の作図と推定される。
- ③ 甲本には陰影を付け、立体感を出すという西洋画の技法が取り入れられている(写真81)。以下に示した写真の中では目・鼻・三道(首)周辺に陰影が見られる(写真72)
- ④ 版本は六角堂能満院の憲海等が開版したものから刷った版画である。
- ⑤ 松平近衛が描いた十二天像乙本を原本として大勝院住職・了遍が十二天像丙本を描いた。

謝辞 本稿の作成にあたり、高野山真言宗愛宕山願成院住職 後藤幸雄師の全面的なご協力をいただいた。また前大分県立歴史博物館学芸員の石川優生氏のご教示を得た。さらに当センターの東 晃平氏の御支援をいただいた。記して感謝の意を表する。

なお本稿が願成院と近世の仏画研究の進展に極わずかでも参考に資する部分があるとすれば幸いである。

#### 参考文献

- 京都市立芸術大学芸術資料館 2004 『六角堂能満院仏画粉本』上下巻 株式会社法蔵館  
講談社 1991 『曼荼羅と来迎図・平安の絵画・工芸Ⅰ-』  
竹田市教育委員会 2008 『岡願願成院秘蔵展』  
松尾芳樹 2015 『2014年度 博士論文 六角堂能満院工房と律僧憲海』  
綿貫俊一 2019.12 解説資料『令和元年度特集展Ⅱ 密教仏画の至宝Ⅱ』大分県立埋蔵文化財センター  
綿貫俊一 2020.3 「願成院の仏教絵画 1」『大分県立埋蔵文化財センター研究紀要』第3号 1~38  
綿貫俊一 2021.1 解説資料『令和2年度特集展Ⅱ 密教仏画の至宝Ⅱ』大分県立埋蔵文化財センター  
綿貫俊一 2021.6 解説資料『令和3年度特集展Ⅰ 密教仏画の至宝Ⅲ』大分県立埋蔵文化財センター  
※なお日本の伝統色については、ネットで公開の『和色大辞典』を参考にした。



第3表(2) 願成院・観音寺所蔵仏画のリスト 2022年2月28日現在のリスト改訂版

番号	名称	時代	年代	材質	本紙・額縁(㎝)	所蔵	備考
55	如意輪観音 乙本	江戸	天保5(1834)	絹本着色	60.8 28.0	真中に印「摩訶法大師一千年忌」	『善書五』の個人所蔵の写本が作成
56	法王大師像 己本	江戸	天保5(1834)	絹本着色	60.8 28.0		
57	不動明王像 乙本	江戸	天保5(1834)	絹本着色	60.9 28.1		
58	四部種子曼荼羅 丁本	江戸	天保5(1834)	絹本着色	64.0 29.2	『摩訶法大師一千年忌』本紙下部「善書五」の個人所蔵一枚刷。上記の曼荼羅曼荼羅は四部会。長谷寺の写本が作成	『善書五』の個人所蔵が作成
59	6 現座大師像 乙本	江戸	天保5(1834)	絹本着色	60.6 28.0		
60	釈迦三尊十六菩薩像	江戸	19C前	絹本着色	117.6 60.2		
61	薬師十二神像	江戸	19C前	絹本着色	94.8 42.6	No. 42(960) (2113)と同様に入る。ことと作行が長谷川買一師に類似。印39号	寛政十四年法印淨徳院白
62	不動明王像 甲本	江戸	寛政4年(1792)	絹本着色	59.6 32.0	寛政十四年「静」作行 No. 61(2060)と同様に入る。表裏裏「不動明王御像一幅寛政四丁十一月廿六日京長谷川買一師法印静徳院白山香画師本寺傳法師延暦六十有年 真徳院印令昌。法政五年夏買以口誦法戒之師住持之印」 寛政十四年法印淨徳院白	
63	十二仏表廻經 甲本	近代	19C後~20C前	絹本着色	76.0 35.8	西縁・外縁間に本紙と同じ紙	寛政十四年法印淨徳院白
64	弥勒菩薩像 ♀	江戸	19C前	絹本着色	72.5 37.8	安房木目に持寸	
65	兜率天曼荼羅図 甲本	江戸	19C前	絹本着色	52.5 50.3	『兜率天曼荼羅図 一組 十四枚法華縁起・法華縁起 0199	寛政十四年法印淨徳院白
66	兜率天曼荼羅図 乙本	江戸	文政12年(1829)	絹本着色	121.2 126.6	長谷川買一師(複製)作。一、定刻第十四世御前・龜田重徳	
67	観音菩薩来迎図	江戸		絹本着色	99.0 39.0	鎌倉	鎌倉表「弘法大師御真影之繪 補作浄土観音寺作寶物。鎌倉裏「明治二十三年秋九月 十三次御代代の願成院十五世御前。長谷川買一師」 寛政十四年法印淨徳院白
68	五字文殊菩薩像	江戸		絹本着色	96.0 37.6	寛政十四年法印淨徳院白	
69	如意輪観音尊像 甲本	江戸	寛政8年(1794)	絹本着色	83.0 33.6	印鑑	和平安徳作。府内藤山福徳院白。五字文殊菩薩像は内縁に「静」作行46号。如意輪観音の表裏「寛政六庚寅年七月(即非書46)『五字文殊菩薩尊像・如意輪観音尊像一幅』菩提聖蹟
70	船形観音像	江戸	弘化4年(1847)	絹本着色	133.5 64.0	船形菩薩像。印39号。船長長巻。印39号	
71	普賢延命菩薩像	明治		絹本着色	63.8 29.4	願成院	鎌倉表「建武金吾部地兼茶屋 普賢延命菩薩 共三幅。鎌倉裏「明治十一年二月廿日 高工長谷川氏代氏所願成院十五世御前。高工 725(81)号」に付432号
72	経金式四部種子曼荼羅図	明治	明治31年(1898)	絹本着色	64.0 29.6	願成院	
73	空尊菩薩像 甲本	江戸	安永8年(1809)	絹本着色	92.0 44.0	願成院	藤山重三郎(複製)作(彦平蔵本紙に潤澤)『願成院白(表)』本紙に内縁に、他に天地中縁
74	空尊菩薩像 乙本	江戸		絹本着色	90.6 43.2	願成院	
75	五大明王 甲本	室町	15C	絹本着色	115.2 51.0	印不	鎌倉表「東渡寺不働院 兜率菩薩代 表裏裏・鎌倉裏「長谷川買一師」作。一、願成院。印385号
76	五大明王 乙本	江戸		絹本着色	110.6 52.2	願成院	
77	五大力呪菩薩像 甲本	江戸		絹本着色	117.8 66.0	願成院	三大方明と摩訶 願成院所蔵。願成院の三大方明の本に付。印386号
78	五大力呪菩薩像 乙本	江戸		絹本着色	104.2 46.4	願成院	
79	不空罽拏念慧王二童子像	明治	明治25年(1890)	絹本着色	91.6 46.4	願成院	鎌倉表「不空罽拏念慧王 願成院。鎌倉裏「明治三十二年十月十日 京都定住氏所願成院。印39号。標示不可 印301号
80	不動明王 丙本	江戸		絹本着色	45.2 21.2	願成院	
81	梵天像(十二天像)	江戸	寛政5年(1793)	絹本着色	88.2 36.6	和平安徳作。鎌倉に「如意輪観音五字文殊五大明王」	大願院は「静」作行。念慧王一、標示不可。和平安徳作の写しと上部のに付内縁に鎌倉の種子(複製)を長巻裏に付ける。輸入は黒漆塗りの複製画。
82	1 毘沙門天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.8 37.8	和平安徳作。鎌倉に「如意輪観音五字文殊五大明王」	
83	2 風天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	96.0 37.2		
84	3 地天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.7 37.6	和平安徳作。鎌倉に「如意輪観音五字文殊五大明王」	
85	4 日天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.7 37.6		
86	5 伊舎婁天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.7 38.0	大願院は「静」作行。念慧王一、標示不可。和平安徳作の写しと上部のに付内縁に鎌倉の種子(複製)を長巻裏に付ける。輸入は黒漆塗りの複製画。	
87	6 夜叉天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.8 37.7		
88	7 次天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	98.0 37.8	大願院は「静」作行。念慧王一、標示不可。和平安徳作の写しと上部のに付内縁に鎌倉の種子(複製)を長巻裏に付ける。輸入は黒漆塗りの複製画。	
89	8 未天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.9 37.8		
90	9 摩利天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.6 37.9	大願院は「静」作行。念慧王一、標示不可。和平安徳作の写しと上部のに付内縁に鎌倉の種子(複製)を長巻裏に付ける。輸入は黒漆塗りの複製画。	
91	10 月天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.7 37.7		
92	11 毘摩提天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	97.9 37.7	大願院は「静」作行。念慧王一、標示不可。和平安徳作の写しと上部のに付内縁に鎌倉の種子(複製)を長巻裏に付ける。輸入は黒漆塗りの複製画。	
93	12 梵天像(十二天像 西本)	江戸	文化9年(1812)	絹本着色	98.0 37.9		
94	赤不動像	江戸		絹本着色	116.2 43.5	願成院	赤不動尊 宗仙大師 御筆寫 願成院所蔵。鎌倉裏「寛政十四年法印淨徳院白
95	1 不動明王像(不動明王二童子像)	江戸	19C前中	絹本着色	91.8 37.3	三幅一員 了六角堂在願成院法前本住持浄徳院2009」に記載された186~2148号	
96	2 経多面童子像(不動明王二童子像)	江戸	19C前中	絹本着色	92.0 37.2	不動明王像は現本	
97	3 持鉢童子像(不動明王二童子像)	江戸	19C前中	絹本着色	91.5 37.2		
98	五光二菩薩像	明治	19C後	絹本着色	89.0 33.0	願成院	表裏表「五光二菩薩」願成院所蔵。印374号 印4号
99	大元帥明王像 甲本	室町		絹本着色	89.2 37.4	願成院	
100	大元帥明王像 乙本	江戸	文化10年(1833) 19C初	絹本着色	116.4 60.2	願成院	長谷川買一師(複製)作。中川丸蔵・久義等作はその没年からの年代別に類似しか。丁本文化10年7月買一師の没年が文化10年のため類似しか。印389号 表裏裏「大元帥王」。鎌倉裏「鎌倉府 愛宕山行佛。印389号 表裏裏「大元帥王 丸蔵寺存行 文化十四年 7 月 長谷川買一師」 鎌倉裏「大元帥王丸蔵寺存行 文化十四年 7 月」
101	天弓曼荼羅王像 甲本	江戸	正徳4年(1710) ♀	絹本着色	118.0 70.6	願成院	
102	曼荼羅王像	江戸	天保14年(1843)	絹本着色	94.4 40.4	印大	鎌倉表「曼荼羅王」願成院所蔵。 鎌倉裏「天保十四年正月五日 丸蔵山十六世御前代。表裏裏「曼荼羅王」 印4号

第3表(3) 願成院・観音寺所蔵仏画のリスト 2022年2月28日現在のリスト改訂版

番号	名称	時代	年代	材質	本紙、裏紙(横)	所蔵	備考
103	天弓受明王像 乙本	江戸		絹本着色	91.3 45.0		先是順金で高輪製 旧179号
104	草薙明王像	江戸		絹本着色	88.5 29.6		軸は木製 展示不可
105	孔雀明王像	江戸		絹本着色	102.7 51.6		軸は木製
106	高野西社明神像	江戸	天保5年(1834)	絹本着色	94.7 45.2	願成	福吉寺(高野明神高野 御霊園) 堂内仏什物: 高野高天(天保元龍皇甲午年三月新造之 高野長谷川第一良一住持) 長谷川住持(住持天保五龍皇天保二年 寺内長谷川御霊園) 長谷川住持(住持天保五龍皇天保二年 寺内長谷川御霊園) 高野高天(天保五龍皇甲午年三月新造 高野長谷川住持一良一住持) 願成寺住持(住持天保五龍皇天保二年 寺内長谷川御霊園)
107	受命地蔵菩薩圖像 甲本	江戸	天保5年(1834)	絹本着色	101.4 44.8	願成	堂内仏什物 長谷川住持 天保五龍皇 高野高天(一千九百四十四年) 長谷川住持(住持天保五龍皇天保二年 寺内長谷川御霊園)
108	弘法大師像 宛本	江戸	天保5年(1834)	絹本着色	94.6 45.2	願成	堂内仏什物 長谷川住持 天保五龍皇 高野高天(一千九百四十四年) 長谷川住持(住持天保五龍皇天保二年 寺内長谷川御霊園)
109	聖天像	江戸	190中	絹本着色	82.0 21.4		堂内仏什物 長谷川住持 天保五龍皇 高野高天(一千九百四十四年) 長谷川住持(住持天保五龍皇天保二年 寺内長谷川御霊園)
110	三宝尊神像	江戸	文久元年(1861)	絹本着色	100.0 41.4		一、横濱護国寺本、寛之文久元年(二月九日) [寺等所蔵品] 高野高天(天保五龍皇天保二年 寺内長谷川御霊園) 以順金で高輪製
111	1 彌勒天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二福一具 旧21号
112	2 大天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧21号
113	3 梵天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧21号
114	4 月天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧22号
115	1 帝釈天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧25号
116	6 地天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧26号
117	7 伊舎婆天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧18号
118	8 毘摩提天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧28号
119	9 風天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧27号
120	10 水天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧1号
121	11 提沙門天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧26号
122	12 日天像(十二天像 甲本)	江戸	190前中	絹本着色	94.4 45.4		十二天像 旧29号
123	楕梨図 甲本	江戸		絹本着色	101.1 45.7		箱107 有願108頁、左向二幅掛 軸は木製
124	金光明最勝王経 觀世音菩薩	江戸	17C	絹本着色	42.0 21.5	願成	箱107 有願108頁、左向二幅掛 軸は木製
125	法八郎沙門天像	江戸		絹本着色	67.5 30.2	願成	箱107 有願108頁、左向二幅掛 軸は木製
126	光明高言字輪受菩薩圖	江戸		絹本着色	71.7 28.5	願成	箱107 「万人授沙門天 願成院」軸は木製 旧91号
127	一字金輪仏(釈迦牟尼佛)	明治		絹本着色	56.0 28.6	願成	箱107 「菩提樹下 奉願月輪藏(観音寺)」 堂内仏什物 旧118号
128	金光明最勝王経受菩薩圖 乙本	江戸		絹本着色	96.1 26.3		箱107 軸は順金で高輪製 旧105号
129	密宗金剛般若図	江戸		絹本着色	125.7 47.0		箱107 軸は木製 旧107号
130	辨女像主像 甲本	江戸	190前	絹本着色	48.9 22.7		箱107 永天と墨書 六角堂願成院の本に類似 旧113号
131	西部種子曼荼羅図 沈本	江戸	1834年以降	絹本着色	78.3 36.5	願成	箱107 種子曼荼羅 願成院(1834年) 本(1834年)
132	十六羅漢像	江戸		絹本着色	28.0 28.7		箱107 「法苑珠林」軸は木製 本(1834年)
133	1 八世像 乙本(御無許三篇一付 御霊像)	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	79.3 37.3	前見	真清書庫 1357二幅 天保十己亥年三月二十一 八世大僧 願成寺現在住持像(旧84号) 136 天保十己亥年三月二十一 八世大僧 願成寺現在住持像(旧84号)
134	2 八世像 乙本(御無許三篇一付 御霊像)	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	79.3 37.4	前見	
135	1 祖法菩薩(八世像 甲本) 8-1	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	91.0 40.1		
136	2 祖法菩薩(八世像 甲本) 8-2	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	90.8 40.1		
137	3 祖法菩薩(八世像 甲本) 8-3	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	90.9 40.2		
138	4 空三尊(八世像 甲本) 8-1	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	91.0 40.1	願成	
139	5 海無量三尊(八世像 甲本) 8-5	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	91.8 40.1		
140	6 一行阿闍梨(八世像 甲本) 8-6	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	91.1 40.2		
141	7 善業阿闍梨(八世像 甲本) 8-7	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	91.1 40.2		
142	8 弘法大師(八世像 甲本) 8-8	江戸	天保10年(1839)	絹本着色	90.7 40.2		
143	彌勒天(十二天國障風 右巻)	江戸		絹本着色	116.9 42.7	願成	(左巻第一節)
	大天(十二天國障風 右巻)		絹本着色	116.4 42.0	(左巻第二節)		
	帝釈天(十二天國障風 右巻)		絹本着色	116.6 42.2	(左巻第三節)		
	伊舎婆天(十二天國障風 右巻)		絹本着色	116.5 42.1	(左巻第四節)		
	日天(十二天國障風 右巻)		絹本着色	116.9 42.0	(左巻第五節)		
	梵天(十二天國障風 右巻)		絹本着色	116.6 42.0	(左巻第六節)		
144	地天(十二天國障風 左巻)	江戸		絹本着色	116.8 42.3	願成	(左巻第一節)
	月天(十二天國障風 左巻)		絹本着色	116.5 42.5	(左巻第二節)		
	提沙門天(十二天國障風 左巻)		絹本着色	116.3 42.1	(左巻第三節)		
	風天(十二天國障風 左巻)		絹本着色	116.9 42.9	(左巻第四節)		
	水天(十二天國障風 左巻)		絹本着色	116.6 42.5	(左巻第五節)		
	彌勒天(十二天國障風 左巻)		絹本着色	116.9 42.2	(左巻第六節)		
145	種子高言図	昭和*		絹本着色	50.1 13.8		箱107 軸は印刷用紙 本紙、4枚の紙裏付。右巻の本紙が同質の紙
146	文殊菩薩像	昭和*		絹本着色	42.1 22.4	願成	箱107 文殊菩薩 願成院 本紙2枚の紙を裏付合弁
147	楕梨図 乙本	昭和*		絹本着色	103.7 37.1		箱107 右向一巻一葉 筆致に印州と使用198と本紙裏紙が同じ





## 大分県立埋蔵文化財センター年報（令和2年度）

### 第1章 令和2年度 大分県立埋蔵文化財センターの事業実績

#### I 埋蔵文化財保護行政の中核的役割を担う

##### 1 発掘調査の推進

県事業関係の発掘調査は、上田原東遺跡、大肥吉竹遺跡、牛神城跡、戸室台遺跡の4件の本調査を行い、国土交通省等の受託事業については昨年度に引き続き、三光本耶馬溪道路の岡山遺跡で本調査を実施した。また、分布調査は県土木建築部事業で541件、県農林水産部事業関係で135件であった。試掘・確認調査は46件実施した。

##### (1) 本調査（5件）

第1表 県事業関係本調査箇所

事業主	事業名	遺跡名等	所在地	調査期間	調査面積	調査担当	主な時代	主な遺構・遺物
豊後大野土木事務所	県道三重新幹線道路改良事業	上田原東遺跡	豊後大野市	5月7日～1月22日	3189㎡	横澤 慈 藤貫俊一	縄文～古墳、中世	竪穴建物 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器
日田土木事務所	大肥川河川災害復旧等関連緊急事業	大肥吉竹遺跡	日田市	4月20日～7月2日	4143㎡	植田純正 後藤一重	古代	溝 須恵器、陶磁器
中津土木事務所	都市計画道路外馬場跡矢堂線街路改良事業	牛神城跡	中津市	11月18日～2月2日	682㎡	植田純正	中世～近世	溝、井戸、榎列土器、陶磁器、木製品
臼杵土木事務所	双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業	戸室台遺跡	臼杵市	11月30日～3月24日	273㎡	横澤 慈	近世	石切場 陶磁器

第2表 受託事業関係本調査箇所

事業主	事業名	遺跡名等	所在地	調査期間	調査面積	調査担当	主な時代	主な遺構・遺物
国土交通省大分河川国道事務所	国道212号三光本耶馬溪道路	岡山遺跡	中津市	10月29日～11月12日	170㎡	佐藤 信	中近世	竪・五輪塔片

##### (2) 分布・試掘・確認調査（約822件）

第3表 分布・試掘・確認調査件数

区分	調査件数	期間	調査担当	備考
1 県土木建築部事業分布調査	541	令和3年3月	横澤他	
2 県土木建築部他事業試掘・確認調査	37	令和2年4月～令和3年3月	横澤他	要本調査3件
3 県農林水産部事業分布調査	135	令和2年10月～令和3年1月	土谷他	
4 その他県事業試掘・確認調査	4	令和2年7月～令和2年11月	植田他	
5 近世重要遺跡詳細分布調査	約100	令和2年4月～令和3年3月	土谷他	
6 国道10号高江拉幅	1	12月3日	服部真和	
7 国道210号横瀬拉幅	3	令和3年2月～3月	佐藤他	
8 筑後川水系花月川河川改修事業	1	1月20日	服部真和	

### (3) 整理・報告書等

発掘作業に係る遺物の整理作業を継続して行い、その調査報告書として『陣箱遺跡』『恒道原田遺跡』の県事業関係2冊、学校関係の施設整備で『雄城台遺跡』1冊、『四日市遺跡4』の土地開発公社関係1冊、『近世重要遺跡詳細分布調査の『中津市・宇佐市図表編』の計5冊及び『調査概報』、『研究紀要』を刊行した。

第4表 令和元年度に刊行した印刷物

報告書番号	遺跡名等	副題等	担当者	総頁数
1	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第17集	陣箱遺跡	県道百枝大野線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	小柳和宏 A4版 80頁
2	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第18集	恒道原田遺跡	県道山香院内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	横澤 淳 A4版 64頁
3	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集	雄城台遺跡	大分県立大分雄城台高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	小柳和宏 A4版 442頁
4	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第20集	四日市遺跡4	玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	服部真和 船貫俊一 小柳和宏 A4版 488頁
5	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第21集	近世重要遺跡詳細分布調査報告書	第1集 中津市・宇佐市図表編	土谷崇夫 A4版 80頁
6	大分県内遺跡発掘調査概報24			横澤 淳 A4版 30頁
7	大分県立埋蔵文化財センター研究紀要第4集			松本康弘 A4版 72頁

### (4) 所蔵資料の活用

県立埋蔵文化財センターとして、昨年度同様、約20件の資料・写真貸出、資料調査の対応を行った。

#### ① 所蔵資料の貸出し

第5表 所蔵資料貸出し

貸出機関	期間	内容
1 大分県立博物館	4月1日～3月31日	庄の原遺跡ナイフ形石器2点ほか 常設展示
2 大分県立三重総合高等学校	4月23日～5月31日	黒曜石原石、岩鼻岩陰遺跡石織、中世大友府内町跡青花等 貸出し。歴史授業で使用
3 大分県立博物館	5月28日～ 9月30日	後泊遺跡小型仿製鏡、雄城台遺跡破鏡、佐知遺跡銅銅片等 貸出し 令和2年度企画展『青銅の煌めき』で展示
4 大分県立博物館	5月25日～ 令和3年3月31日	北/後遺跡弥生土器、浜遺跡弥生土器等 貸出し 『令和2年度 京都国立博物館考古資料相互活用推進事業』で使用
5 国東市教育委員会	6月8日～ 11月20日	安国寺集落遺跡展示遺物 貸出し 国東市歴史体験学習館企画展示室で展示
6 公益財団法人サントリー芸術財団サントリー美術館	6月30日	中世府内大友氏遺跡ガラス製品3点 『鹿島美術研究』へ掲載
7 吉野ヶ里公園管理センター	9月19日～11月8日	古戸遺跡弥生前期壺、四日市遺跡弥生後期甕・壺・高坏等 貸出し 令和2年度企画展『よみがえる邪馬台国 - 邪馬台国と豊前・宇佐 -』で展示
8 株式会社ミネルヴァ書房	8月17日	中世大友府内町跡朱漆鍍金楼閣騎馬人物文唐枕、ヴェロニカのメダイ写真貸出し。『大友宗麟』へ掲載
9 鹿児島県歴史・美術センター黎明館	9月10日～11月20日	中世大友府内町跡金箔土師器、真鍮製小柄等 資料・写真貸出し

第6表 所蔵資料の貸出 2

貸出機関	期間	内容
10 中津市歴史博物館	12月16日～3月5日	古戸遺跡土偶、佐知遺跡土偶、尾知遺跡土偶等貸出し「発掘された日本列島展」の地域展示で展示
11 大分県立歴史博物館	1月18日～4月12日	八坂遺跡土師器・青磁碗、草場壙跡短刀・ヤットコ等貸出し 令和2年度企画展「祈りと願い」で展示
12 株式会社かみゆ	11月19日	中世大友府内町跡ベネチアンガラス、メダイ等 遺物写真の貸出し
13 大分県立歴史博物館	1月18日	中津市妙光寺石仏阿弥陀如来像 写真の貸出し 『神代茶里の調査本編』に掲載
14 大分県立歴史博物館	12月13日	万田四日市縄平成28年度発掘調査 写真の貸出し 『神代茶里の調査本編』に掲載
15 日田市文化財保護課	1月28日	小迫辻原遺跡土器の閲覧 報告書作成のための調査
16 宮崎県西都原考古博物館	令和3年3月1日～	下郡桑苗遺跡インシシ類（ブタ）遺体 写真の貸出し 令和3年度特別展「猪と人間」に展示
17 中津市歴史博物館	令和3年3月1日～	上/原横穴墓群須恵器等 貸出し 「博物館内常設展」で展示
18 大分市教育委員会	3月31日	中世大友府内町跡ベトナム産陶器、骨牌、唐枕、チェーン、指輪等 写真の貸出し 南蛮BVNGO交流館 シアターゾーンで上映

## ② 所蔵資料の利用

第7表 所蔵資料利用

利用者	期間	内容
1 熊本大学学生	9月3日～8日	古庄屋遺跡、伊藤田中遺跡、八坂中遺跡瓦器碗の閲覧、実測
2 金沢大学教授	3月11日	エゴノクチ遺跡縄文前期土器、かわじ池遺跡縄文前期土器の閲覧 アカホヤ噴火後の生業に関する研究プロジェクト予備調査
3 神縄国際大学教授	3月22日	大友府内町跡34次調査両書櫛（唐櫛） 琉球列島に関連する生活文化の復元のため

## II わかりやすい展示、楽しく学べる歴史体験

### (1) 常設展示

#### ① 豊の国考古館

大分県内で出土した発掘資料を基に旧石器時代から近世にいたる展示をすることで、大分県の通史を学ぶ。

#### ② BVNGO大友資料館

中世大友府内町跡出土品を中心とした豊富な発掘資料の展示をすることで、戦国大名大友氏について学ぶ。



### (2) 企画展示

春先の『安国寺遺跡展』から3月の『学校の遺跡展』まで、年間4回の企画展を開催した。

#### ① 企画展 1

##### 『安国寺遺跡展』

4月7日(火)～4月16日(木)

5月12日(火)～5月17日(日)

開催期日 15日(新型コロナウイルス感染対策で途中閉館)

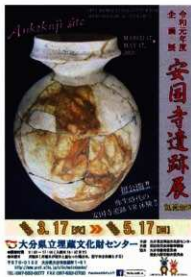
入館者数 135名

国東市の安国寺遺跡は、昭和24年から大学や高校が中心となって発掘調査を行い、多くの弥生土器や石器、木製品が出土し、「西の登呂」と呼ばれた。最初の発掘調査から70年経った今年、安国寺遺跡と同時代の遺物を展示し、弥生時代後期の実像に迫る。

(主な展示資料)

安国寺式土器の壺、甕、高坏

木製品 鋏、鋤



#### ② 企画展 2

##### 『BVNGO NAMBAN 宗麟の愛した南蛮文化』

10月10日(土)～12月13日(日)

開催期日 54日

入館者数 2,076名

大友氏の拠点都市であった豊後府内遺跡から出土した陶磁器類などの南蛮遺物、そして津久見市が長い年月をかけて収集してきた南蛮漆器や絵画などを中心に、国内各地に所蔵される関連作品による展示。

(主な展示資料)

象嵌南蛮人文鏡(津久見市)

天正遣欧使節訪問記念メダル【グレゴリウス13世メダル】

(長崎歴史文化博物館)

鉄砲の絵を描いた真鍮製小柄・灰匙

(県埋蔵文化財センター/国指定)



### ③ 企画展 3

#### 『宇佐高村焼とその世界』

令和3年1月9日(火)～2月28日(日)

開催期日 51日

入館者数 1,158名

高村(現宇佐市下高)は、中世において宇佐神宮、弥勒寺が管轄する土器作りのムラであったことが知られています。生活様式の変化とともに、戦後には土器作りが行われなくなりました。高村の地で焼かれた「高村焼」について最新の研究成果をふまえて、その実像にせまりました。

(主な展示資料)

弥勒寺跡出土資料(大分県立歴史博物館)

小部遺跡出土資料(宇佐市教育委員会)

中津城下町遺跡出土資料(中津市教育委員会)



### ④ 企画展 4

#### 『学校の遺跡』

令和3年3月23日(火)～3月31日(水)

開催期日 8日

入館者数 116名

多くの学校は地域の中核となる位置にあるため、遺跡の上に建つ学校も少なくありません。本企画展では、そうした学校の足下に眠っている遺跡から発掘された資料を中心に紹介します。皆さんの母校の下にはどんな歴史が眠っていたのでしょうか。

(主な展示資料)

大分雄城台高校 巴形銅器(弥生時代/県指定有形文化財)

大分鶴崎高校 銅銭(中世)

中津南高校 土製模造鏡・石製装身具(古墳時代)



## (3) 特集展示

企画展と併行しながら年間3回、特集展示を開催した。

### ① 特集展示 1

#### 「密教仏画の至宝」

令和2年4月1日(水)～令和2年7月5日(日)

近年、竹田市の願成院で中世・近世の密教仏画が大量に確認され、大分県における密教仏画としては極めて珍しい仏画も含まれていた。これまで美術史の分野では、中世の石造物を中心に調査研究・展示を行ってきたが、今回は近世の豊後密教文化の一面を紹介した。

(主な展示テーマ)

1期 忿怒の仏1

2期 忿怒の仏2

3期 愛の仏と請雨の仏

4期 両部曼荼羅図

5期 折りの曼荼羅と仏



## ② 特集展示2

### 「願成院愛染堂の秘宝」

令和2年7月14日（火）～8月30日（日）

願成院は、岡藩の藩主であった中川氏により建てられた領内七万石の祈禱所だった。明治時代はじめの神仏分離令など、苦難の時代を歩んできた願成院ですが、近年歴代の住職によって護り伝えられてきた大量の寺宝のあることがわかってきた。その一部についてはこれまで「密教仏画の至宝」として展示してきたが、今回は仏像や密教法具に注目し展示した。

（主な展示品）

密教法具 三種（江戸時代） 舍利容器（江戸時代）  
大威徳明王像（江戸時代） 千手観音像（室町時代）



## ③ 特集展示3

### 「密教仏画の至宝Ⅱ」

令和2年1月9日（土）～3月21日（日）

竹田市願成院愛染堂に伝わる貴重な密教仏画資料を4期に分けて紹介した。

1期 十二天                      2期 曼荼羅  
3期 密教の系譜                4期 密教の祖師と高僧

## （4）歴史体験学習

歴史体験をとおして古代人の知恵を知り、生きる力をはぐくむための体験学習を、毎日実施している。子どもたちは古代人になりきって、勾玉や土器作り、火おこし、組紐作りなどを学習している。今年は約2,000人が体験をとおして歴史を楽しく学んだ。

第8表 歴史体験学習一覧

期日	研修内容	会場	参加者
1	勾玉製作 加工しやすい石（ろう石）を用いて、金やすりや紙やすりなどを使い、勾玉を製作する。		120名
2	大形土製品製作 乾燥しやすいニワ粘土を用いて、中世大友府内町跡の発掘調査で出土する大形土製品を製作する。		285名
3	ミニ瓦製作 「瓦の製作工程を学ぶため、瓦の模様を入れた型に特殊な粘土を押し込み、ミニ瓦を製作する。		3名
4	古代機織り体験 簡易型の機織り機と毛糸を用いて、コースターや小形マットを製作する。		122名
5	組紐体験 刺繍糸3本もしくは5本を使い、自らの指先の動きで糸を組み上げ紐を製作する。		346名
6	火おこし体験 簡易な火おこし機（舞り技法）を使い、藁に火をつける体験をする。		288名
7	鋳造体験 貨幣や巴型銅器、銅鐸などの鋳型に、低温度で溶ける金属を流し込み、製品を作る鋳造体験を行う。		71名
8	土器製作 陶芸用粘土を用いて、小形の縄文土器や弥生土器を製作し、乾燥後体験学習館に設置している電気窯で焼き上げる。		301名

### Ⅲ 教育普及の充実

#### (1) 講演会・講座

秋の企画展「BVNGO NAMBAN 宗麟の愛した南蛮文化」及び冬の企画展「宇佐高村焼とその世界」に関連した理文講演会を大分市平和市民公園能楽堂で開催した。そのほか考古学講座を6回、児童・生徒を対象とした特別講座を2回開催した。

10月の講演では、「オープニング記念コンサート in 能楽堂」として大分県立芸術緑丘高校生徒と先生による弦楽四重奏、そして津久見樗の美少年少女合唱団の合唱を行い、その美しい音色と歌声に会場者から大きな拍手がおくられた。

#### ① 理文講演会 1

「南蛮文化を科学する」

令和2年10月10日（土）

大分市平和市民公園能楽堂 参加者162名

企画展「BVNGO NAMBAN 宗麟の愛した南蛮文化」関連の講演会、講師に東京文化財研究所広領域研究室長の小林公治氏をむかえ、南蛮漆器とその理化学的分析から分かってきた最新の研究成果についてお話いただきました。

演題「キリスト教の布教と南蛮漆器—理化学的分析の検討、メダイ研究との対比から—」

#### ② 理文講演会 2

「南蛮貿易でもたらされた鉛」

令和2年11月29日（土）

大分市民公園能楽堂 参加者115名

企画展「BVNGO NAMBAN 宗麟の愛した南蛮文化」関連の理文講演会、帝京大学・別府大学客員教授の平尾良光氏の基調講演では、鉛同位体比分析によって明らかになってきた南蛮貿易の実像について、詳しく紹介いただいた。研究報告では、山下俊雄氏（津久見市教育委員会）からは津久見市所有の南蛮関連資料とそこからみる南蛮貿易について、また、吉田寛氏（大分県立歴史博物館）からは、南蛮屏風に描かれた町や「南蛮人」等の姿と実際の考古資料との対比の話しをいただいた。

#### ③ 理文講演会 3

「まぼろしの焼き物 高村焼」

令和3年2月21日（土）

大分平和市民公園能楽堂 参加者80名

企画展『宇佐高村焼とその世界～まぼろしの焼物を探る～』の関連行事で、歴史学・考古学から高村焼について迫りました。基調講演では、飯沼賢司氏（別府大学学長）からは歴史史料からみた宇佐神宮と高村焼の関わりについてご講演いただいた。また、上野淳也氏（別府大学教授）からは戦国大名の権力と中世土器の関係、そこから見える高村焼のつながりについて話しがあった。その後には飯沼氏、上野氏、報告した山本をパネリストに、小柳をコーディネーターとしてシンポジウムを行った。





## (2) 考古学講座

外部講師や埋文センター職員が講師を務める講座を毎月実施し、各回約40名の方が聴講にいらした。埋文講演会がある月は、それを考古学講座に代えて実施した。年間7回開催を計画していたが、新型コロナウイルス感染対策のため、6回の開催にとどまった。

第9表 考古学講座一覧

期日	演題	講師	会場	参加者
1 6月17日(水)	「石塔の宝庫 おおいだ」	原田昭一(歴史博物館)	埋文センター 第2講座室	30名
2 7月15日(水)	「令和元年度発掘調査の成果」	横澤 慈(調査第一課) 服部真和(調査第二課) 小柳和宏(企画普及課)	埋文センター 第2講座室	30名
3 8月19日(水)	「願成院愛染堂の秘宝」	綿貫俊一(調査第二課)	埋文センター 第2講座室	39名
4 9月16日(水)	「大分の中世土器について」	佐藤 信(企画普及課)	埋文センター 第2講座室	38名
5 12月16日(水)	「臼杵摩崖仏の修理と国宝への歩み」	菊田 徹氏(元臼杵市歴史資料館館長)	埋文センター 第2講座室	30名
6 1月20日(水)	「宇佐高村焼とその世界」	山本哲也(企画普及課)	埋文センター 第2講座室	42名

## (3) 特別講座

児童・生徒を対象としたジュニア考古学講座で、考古資料に直接触れながら考古学について学ぶことで、考古学や郷土の歴史に興味を持ってもらうことを目的に年2回開催している。

### ① 特別講座1

#### 「土器づくり体験」

令和2年8月2日(日)

第2講座室・豊の国考古館ほか 参加者33名

土器作りの歴史やその技法等を学習した後、粘土で土器製作を作製した。

### ② 特別講座2

#### 「親子で鋳造体験」

令和2年2月7日(日)

第1講座室・歴史体験学習館ほか 参加者26名

鏡等の鋳造方法などについて勉強したのち、シリコン型に溶かしたチョコレートを流し込み、高村焼をモチーフにしたチョコを作製した。



## (4) ボランティア養成講座

埋蔵文化財センターの移転拡充にともない、応募をはじめたボランティアの養成も6年目をむかえ、修了した22名の方が図書整理や歴史体験指導等に活躍いただいている。

今年は9回の養成講座を予定していたが、新型コロナウイルス感染防止のため、実施を断念した。その代わりに、養成講座の受講生には、考古学講座及び埋文講演会への参加を促した。

#### IV 連携の強化（学校・地域等）

##### (1) 学校との連携

小中学校の社会科学見学や修学旅行、大学の授業で当センターを活用いただいた。また、大学生のインターンシップで将来の進路に関する学生の受入れも行った。

##### ① 職場体験・インターンシップ受入れ

例年、職場体験として大分市内中学校や県立高等学校の生徒を受入れていたが、今年は新型コロナウイルス感染症防止の観点から、中学・高校が職場体験の実施を見送ったため、県庁でのインターンシップのみ受け入れを行った。

第10表 職場体験・インターンシップ受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 インターンシップ	8月19日～21日	愛媛大学	1名

##### ② 授業・社会科学見学・修学旅行等の受入れ

県内の大学が授業の中で当センターを活用してくださった。また、大分市内の小学校からの依頼を受け、職員を派遣した。そのほか10校の小中学校が社会科学見学で展示見学や歴史体験を行った。

第11表 授業・社会科学見学・修学旅行等受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 授業	6月12日	別府大学史学科	10名
2 授業	6月19日	別府大学史学科	10名
3 出前授業	11月2日	大分市立三佐小学校6年	41名
4 社会科学見学	9月14日	大分大学付属特別支援中等部	26名
5 社会科学見学	10月9日	大分市立神崎小学校	9名
6 社会科学見学	10月22日	由布市立湯布院小学校ほか2校	50名
7 社会科学見学	10月28日	大分市立金池小学校	120名
8 社会科学見学	11月5日	大分市立東大分小学校	74名
9 社会科学見学	2月9日	大分大学付属特別支援中等部	27名
10 社会科学見学	2月20日	臼杵市立臼杵西中学校	5名
11 社会科学見学	3月12日	大分市立津留小学校	68名

##### ③ その他教育関係団体等の受入れ

小・中学校教員の団体が見学・歴史体験で活用していただいた。そのほか県教育センターの実施する教員新採用研修の講師を務めた。

第12表 その他教育団体等の受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 学校関係団体	6月13日	大分県高等学校文化連盟美術部会	2名
2 学校関係団体	6月24日	大分県高等学校文化連盟美術部会	2名
3 学校関係団体	7月10日	大分県高等学校文化連盟美術部会	87名
4 学校関係団体	1月27日	大分県高等学校文化連盟美術部会	7名
5 教員研修「埋蔵文化財センターの活用」	7月28日	小学校・特別支援学校美術等教員対象の研修	12名

## (2) 地域との連携

文化財保護団体や社会教育団体等の展示見学、歴史体験等で20団体以上の申込みがあり、その受入れを行った。また社会教育団体等から研修会での講師の要請があり、職員を派遣した。

### ① 各種団体の展示見学・歴史体験等での受入れ

展示見学の申込みが20団体以上あり、のべ400名ほどの方が利用した。

第13表 各種団体受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 見学	5月26日	体育保健課	40名
2 見学	5月27日	佐伯市市史編纂部	12名
3 見学	6月4日	文教警察委員	10名
4 見学	7月2日	特別支援教育課	12名
5 見学	7月4日	佐伯市市史編纂部	12名
6 見学	7月9日	体育保健課	15名
7 見学	8月4日	佐伯市市史編纂部	12名
8 見学	8月8日	自然保護推進室	10名
9 見学	8月20日	文化課	26名
10 見学	8月21日	大分教育事務所	13名
11 見学	9月1日	学校安心・安全課	20名
12 見学	9月10日	鶴崎公民館講座	24名
13 見学	9月26日	大分県地方史研究会	8名
14 見学・歴史体験	10月1日	文化課	25名
15 見学・歴史体験	10月8日	鶴崎公民館講座	12名
16 見学	10月22日	狭間恵比寿会	20名
17 見学	10月29日	文化課	14名
18 見学・講座	11月4日	南大分公民館	30名
19 見学	11月12日	鶴崎公民館講座	12名
20 見学	11月14日	ボラーノの広場	15名
21 見学	11月17日	玖珠歴史学級	30名
22 見学	2月18日	学校安全・安心課	18名

### ② 研修会等への講師派遣

各市町村にある歴史団体・公民館等の依頼を受けての歴史に関する講演や地域の子どもたちを対象に土器づくり等の歴史体験メニューを実施した。

第14表 研修会・講師派遣等一覧

項目	期日	主催者名等	会場	参加者
1 秋の企画展の見どころについて	9月10日	鶴崎公民館主催の歴史講座	埋蔵文化財センター	24名
2 中津市城館総合調査委員会	10月19日	中津市教育委員会主催の調査委員会	中津市歴史博物館	
3 佐伯市市史編纂市民講座	11月8日	佐伯市教育委員会主催の歴史講座	佐伯市三余館	20名
4 ふるさと再発見！おおいの「タカラモノ」体験	12月6日	県立図書館主催の子ども対象の体験教室	大分県立図書館	12名
5 オーラボ中津教室「土器作りは化学変化」	1月17日	オーラボ主催の体験教室	中津市歴史博物館	15名



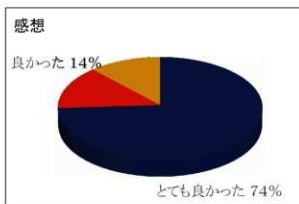
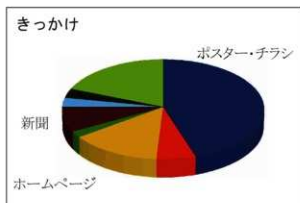
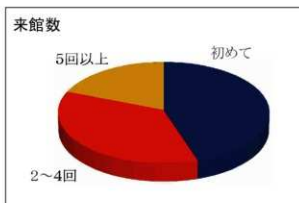
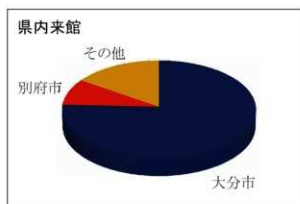
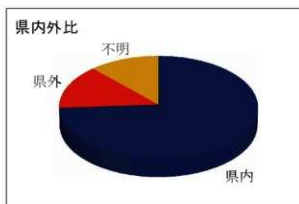
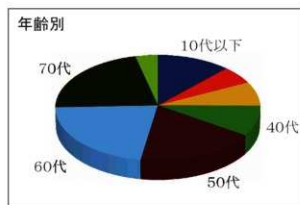
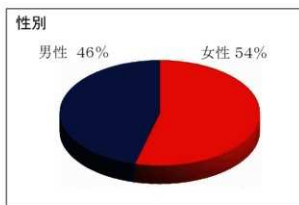
オープニング記念コンサート in 能楽堂  
 上) 県立芸術緑丘高校の弦楽四重奏  
 下) 津久見程の実少年少女合唱団の合唱

吉野ヶ里遺跡出土甕棺の比較常設展示

## 令和2年度 来館者アンケート結果

対象期間 令和2年4月1日～令和3年3月31日

来館者 8,155人 回答者 215人 回答率 2.6%



#### IV 安心・安全な施設づくり（危機管理向上）

当センターは、「豊の国考古館」、「BVNGO大友資料館」の展示施設や歴史体験館、また発掘調査で出土した重要遺物を保管する収蔵庫を有している。そのため、入館者の安心・安全や文化財の保護を目的とした危機管理能力向上のための研修を年7回実施している。

その研修内容には消防署員を講師に迎える初期消火、入館者の避難誘導訓練や救命救急訓練、警察署員を講師とする不審者対応実技訓練、地震や火災に対する初動体制の確認等を実施している。

第21表 安心・安全な施設づくりに向けた研修一覧

項目	期日	目的	研修講座の内容	講師等	参加者
1 職員防災スキル向上	6月29日	館内非常機器取扱い	館内非常機器の説明及びその取扱い	新日本消防設備（株）	14名
2 入館者の安心・安全	7月12日	不審者対応	不審者に対する対応及び実技指導	大分中央警察署	13名
3 シェイクアウト訓練	9月1日	災害時の安全確保	館内放送による安全確保への誘導		14名
4 入館者の安心・安全	9月17日	応急手当（心肺蘇生）講習	救急救命法（胸骨圧迫、AED研修）	フクダ電子西部南販売株式会社	11名
5 入館者の安心・安全	11月19日	感染症への対応	館内の衛生管理（インフルエンザウイルス、新型コロナウイルス感染予防研修）	大分労働衛生管理センター	16名
6 入館者の安心・安全	1月20日	災害時の避難誘導	「考古学講座」開催中の火災発生に伴うボランティアスタッフを活用した受講生避難誘導	埋文ボランティアスタッフとの協働	35名
7 県民防災アクションデー	2月8日	文化財保護・入館者誘導	文化財持出し・初期消火・避難誘導（文化財防火デー対応行事）	大分中央消防署 新日本消防設備（株）	23名

## 埋蔵文化財センター要覧

### 1 沿革

昭和45年(1970)4月	社会教育課内に文化係設置
昭和46年(1971)4月	文化室(文化財係)設置
昭和47年(1972)4月	文化課設置
昭和53年(1978)6月	大分市舞鶴町に埋蔵文化財資料保管・整理用の作業所設置
昭和56年(1981)4月	文化課に埋蔵文化財係設置
昭和62年(1987)4月	埋蔵文化財第一係・埋蔵文化財第二係の2係体制
平成9年(1997)4月	舞鶴町の作業所を大分市中判田の工業試験場跡に移転
平成16年(2004)4月	教育庁埋蔵文化財センター設置 総務課・調査第一課・調査第二課の3課体制
平成21年(2009)4月	管理予算班・一般事業班・大型事業班・受託事業班・資料管理班の5班体制
平成26年(2014)4月	管理予算班・県事業班・受託事業班・資料管理班の4班体制
平成27年(2015)8月	旧芸術会館跡地への移転が正式決定
平成29年(2017)2月	旧芸術会館にて業務開始
平成29年(2017)4月	大分県立埋蔵文化財センター発足 総務課・企画調査課・調査第一課・調査第二課の4課体制

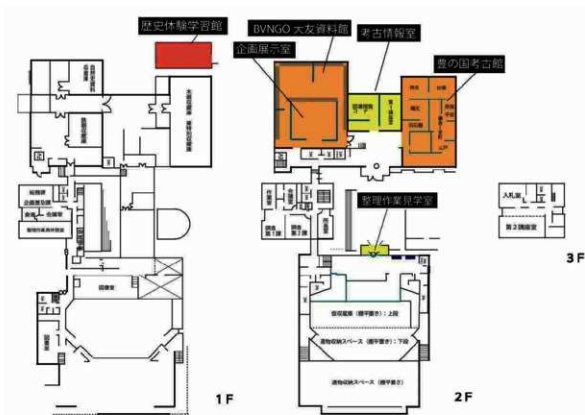
### 2 施設の概要

(1) 施設の場所 大分市牧緑町1-61

(2) 規模	敷地面積	18,924.64㎡
	建築面積	4,345.37㎡
	延べ床面積	7,301.98㎡

(3) 主な施設

- ① 管理棟(1,404.9㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート3階建  
所長室・事務室・第2講座室・入札室・会議室
- ② 展示棟(3,108.35㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート2階建  
豊の国考古館(459.25㎡)  
BVNGO大友資料館(599.80㎡)  
考古情報室・第1講座室(174.96㎡)
- ③ 整理収蔵棟(2,629.79㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋鉄板3階建  
整理作業室・一時保管室・写場・収蔵庫
- ④ 歴史体験学習館(158.94㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート1階建



### 3 利用案内(大分県立埋蔵文化財センター)

- (1)開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)  
 (2)休館日 年末年始(12/28～1/4)・月曜日  
 (月曜日が祝日と重なった場合は、翌平日を休館とする)  
 (3)入館料 無料  
 (4)交通 バス 牧バス停 徒歩3分  
 古ヶ鶴公民館入口バス停 徒歩3分  
 JR 牧駅 徒歩5分  
 車 国道197号を通過、大分駅から10分  
 駐車場 170台 車いす利用者駐車場・大型車駐車場あり





## 4 管理規則・利用規則

### (1) 大分県立埋蔵文化財センター管理規則

平成二十九年四月一日  
大分県教育委員会規則第九号

大分県立埋蔵文化財センター管理規則をここに公布する。

#### 大分県立埋蔵文化財センター管理規則

(趣旨)

第一条 この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例(平成二十八年大分県条例第四十五号)第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)の組織、運営その他必要な事項を定めるものとする。

(課の設置)

第二条 センターに、総務課、企画普及課、調査第一課及び調査第二課を置く。  
(総務課の分掌事務)

第三条 総務課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 公印の管守に関すること。
- 二 文書の收受、発送、編集及び保存に関すること。
- 三 職員の仕事、勤務、研修及び福利厚生に関すること。
- 四 予算の執行並びに現金、有価証券及び物品の出納命令に関すること。
- 五 関係行政機関及び関係団体との連絡調整に関すること。
- 六 施設及び設備の維持管理に関すること。
- 七 施設及び設備の利用に関すること。
- 八 その他他課の所掌に属さない事項に関すること。

(企画普及課の分掌事務)

第四条 企画普及課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 出土品その他埋蔵文化財に関する資料の保存及び展示並びに体験学習の実施に関すること。
- 二 歴史及び考古についての講演会、講習会等の開催に関すること。
- 三 県民の歴史及び考古に関する調査研究活動を援助すること。
- 四 学校、図書館、研究所、博物館、資料館、公民館等の諸施設に対する歴史及び考古についての協力及び活動の援助に関すること。
- 五 埋蔵文化財についての目録、年報、案内書、図録、調査研究の報告書等の刊行に関すること。

(調査第一課の分掌事務)

第五条 調査第一課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
- 二 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
- 三 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(調査第二課の分掌事務)

第六条 調査第二課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
- 二 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
- 三 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(職員の職)

第七条 センターの職員の職として、次の職を置く。

- 一 所長
- 二 副所長
- 三 参事
- 四 課長
- 五 課長補佐
- 六 主幹
- 七 副主幹
- 八 主査
- 九 専門員
- 十 主任
- 十一 主事

- 2 所長の職は、非常勤とすることができる。
- 3 所長は、上司の命を受け、センターの事務を掌理し、所長職を指揮監督する。
- 4 副所長は、所長を補佐し、センターの事務を処理する。
- 5 参事は、上司の命を受け、専門的事項の指導及び助言に関する事務並びに特定の事務を処理する。
- 6 課長は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
- 7 課長補佐は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
- 8 主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
- 9 副主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
- 10 主査は、上司の命を受け、事務を処理する。
- 11 専門員は、上司の命を受け、事務を処理する。
- 12 主任は、上司の命を受け、事務に従事する。
- 13 主事は、上司の命を受け、事務に従事する。

(職員の数)

第八条 センターの職員の数は、教育長が定める。

(委任)

第九条 この規則に定めるもののほか、センターの管理に関し必要な事項は、教育長が別に定める。

附則

この規則は、公布の日から施行する。

## (2)大分県立埋蔵文化財センター利用規則

平成二十九年四月一日

大分県教育委員会規則第十号

大分県立埋蔵文化財センター利用規則をここに公布する。

### 大分県立埋蔵文化財センター利用規則

(趣旨)

第一条 この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例(平成二十八年大分県条例第四十五号)第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)の利用に関し、必要な事項を定めるものとする。

(利用時間)

第二条 センターの利用時間は、午前九時から午後五時までとする。ただし、入館は午後四時三十分までとする。

2 大分県教育委員会(以下「教育委員会」という。)が、特に必要があると認めるときは、臨時に前項の利用時間を変更することができる。

(休館日)

第三条 センターの休館日は、次のとおりとする。

一 月曜日(その日が国民の祝日に関する法律(昭和二十三年法律第七十八号)に規定する休日(以下単に「休日」という。)に当たるときは、その日後において、その日に最も近い休日でない日)

二 十二月二十八日から翌年の一月四日まで(前号に掲げる日を除く。)

2 教育委員会が特に必要があると認めるときは、前項の休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

(利用制限等)

第四条 所長は、利用者が次の各号のいずれかに該当し、又は該当するおそれがある場合は、その入館を拒否し、若しくは退館を命じ、又は利用を制限し、若しくは利用を停止させることができる。

一 出土品その他埋蔵文化財に関する資料(以下「資料」という。)並びにセンターの施設及び設備を故意に亡失し、汚損し、若しくは毀損し、又はそのおそれがあると認められるとき。

二 資料の返納を故意に怠ったとき。

三 定められた場所以外で喫煙又は飲食したとき。

四 めいていし、大声を發し、若しくは危険物を持ち込む等の利用者に迷惑を及ぼし、又はそのおそれがあると認められるとき。

五 その他管理上支障があると認めるとき。

(資料の館外貸出し)

第五条 資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、所長が特に必要があると認めた場合については、この限りではない。

(委任)

第六条 この規則に定めるもののほか、センターの利用に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附 則

この規則は、公布の日から施行する。

大分県立埋蔵文化財センター 研究紀要 5

令和4年3月31日 発行

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター  
〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61  
電話 097-552-0077

OITA PREFECTURAL CENTER  
FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

# BULLETIN

## Vol. 5

A Study about the Veronica's Medals, Focusing on  
New Discoveries at Kusazumi District of Hirado City

GOTO, Kohichi

A Study about the Handmills Excavated  
in the Remains of the Matsuo Castles

UEDA, Hiromasa

Esoteric Buddhist Paintings owned by Ganjo-in Temple 2

WATANUKI, Shunichi

---

Archive Annual Report (Fiscal 2021)

Archive Directory

March 2022